

# 第25回 毎日俳句大賞

一般の部

郵送・インターネット・点字応募 / 予選通過作品

## 1724句

- \*予選通過句を、全58ページで公開いたします。
- \*本選者は、この中より、特選1句・秀逸2句・佳作40句を、選出します。
- \*読者賞へのご応募には、この中から「3句」を選び、投票フォームから、ご送信ください。
- \*他の紙誌や俳句大会などへの二重投稿、また、盗作・類似作をはじめ、先行句が明らかになった場合は、その都度、予選通過句のページ内で、取り消しを明記していきます。
- \*類句などに関するお問い合わせや質問は、問い合わせフォームからお送りください。

0 0 0 1  
0 0 0 2  
0 0 0 3  
0 0 0 4  
0 0 0 5  
0 0 0 6  
0 0 0 7  
0 0 0 8  
0 0 0 9  
0 0 1 0  
0 0 1 1  
0 0 1 2  
0 0 1 3  
0 0 1 4  
0 0 1 5  
0 0 1 6  
0 0 1 7  
0 0 1 8  
0 0 1 9  
0 0 2 0  
0 0 2 1  
0 0 2 2  
0 0 2 3  
0 0 2 4  
0 0 2 5  
0 0 2 6  
0 0 2 7  
0 0 2 8  
0 0 2 9  
0 0 3 0

火と水の神せめぎ合ふ修二会かな  
生臭き風吹ききたる晶子の忌  
病む夫の髭を気にする土用入り  
老いし夫鮎のちよんがけ自慢など  
強風に日除けあさがほ無残なり  
老いといふ足枷手枷空つ風  
色の無き風に吹かれる夕まずめ  
向日葵や光と影は対にあり  
柳川のほうつほうと飛ぶ蛍  
登下校を見守る門の日日草  
祝事の匂ひをこぼす八重桜  
ていねいに化粧を落す朧の夜  
風光る手作りパンの小さき店  
五人の子育てし母のちゃんちゃんこ  
万緑の奥処へ誘ふ切通し  
ねこじやらし採れば誰かに触れたくて  
秋の蝶もうこの空は高すぎる  
古文書に推敲跡や秋燈下  
大滝やだいだらぼつちがつくりしか  
新米を炊かん平家の水汲まん  
大空は無窮たるべし原爆忌  
母遠しその母遠し初ちちろ  
鱈酒に五臓六腑の山河なす  
走り根を越ゆる走り根雲の峰  
潮鳴りの空翳りなし神還り  
反核のデモしんがりを枯野人  
八月や涙あふるる空の碧  
かりそめの色をつないで七変化  
先頭を切つて草笛よく鳴る子  
溪流の色翡翠に乗り移る

0060  
0059  
0058  
0057  
0056  
0055  
0054  
0053  
0052  
0051  
0050  
0049  
0048  
0047  
0046  
0045  
0044  
0043  
0042  
0041  
0040  
0039  
0038  
0037  
0036  
0035  
0034  
0033  
0032  
0031

無人駅静かに老いて草茂る  
ふるさとは優しく静か秋桜  
熊撃ちを終へて隠さず修羅の顔  
コスモスや奉仕作業にをみな達  
大きめの制服の群れ山笑ふ  
案山子立つ怒濤の海を真つ向に  
お陰様の心を胸に草筆る  
一月やベイブリッジに暁の空  
墓参り上り下りの人の道  
ストーブや保健教諭の国訛  
一族の墓のぼつりと青田波  
銭湯の鏡にくづす祭髪  
雨粒の木つ端微塵や大西瓜  
どこからが水どこからが薄氷  
打水の最後はバケツ逆さ振り  
山国の空を狭しと夏燕  
爽籟や改札口といふ渚  
耳ふたつ乳房ふたつの寒さかな  
秋うらら田圃の中の絵画展  
結界は女が拓く夏の山  
ほーやれほ母のひとりの盆祭  
頂上や体浮くまで秋気吸ふ  
老梅や盛衰ありし寺を訪ふ  
耕人の上着目につくロゴマーク  
縮景や江戸も都も花盛り  
蝶々の川を渡りて飛びゆけり  
手を止めて耳を澄ませる時鳥  
石鎚の岩を露に梅雨上る  
大賀蓮生きもの小さき水輪うむ  
草刈の男まさりを匂はせる

0 0 6 1  
0 0 6 2  
0 0 6 3  
0 0 6 4  
0 0 6 5  
0 0 6 6  
0 0 6 7  
0 0 6 8  
0 0 6 9  
0 0 7 0  
0 0 7 1  
0 0 7 2  
0 0 7 3  
0 0 7 4  
0 0 7 5  
0 0 7 6  
0 0 7 7  
0 0 7 8  
0 0 7 9  
0 0 8 0  
0 0 8 1  
0 0 8 2  
0 0 8 3  
0 0 8 4  
0 0 8 5  
0 0 8 6  
0 0 8 7  
0 0 8 8  
0 0 8 9  
0 0 9 0

少女乗せスケボー夏を飛ぶごとし  
一齣かたる翁や敗戦忌  
めまとひの散るより早く群がれる  
象山は郷土の山よ稲の花  
形代に息吹きかけて郵送す  
はんざきのどこか「南方熊楠」似  
火櫓の削ぐ勢ひや萩の雨  
祖母の背の黙の夜刈や天の川  
ドミノ倒しさせてみたくて蟻の列  
臍に触るる風あり日脚伸ぶ  
星月夜難民の列くるぐろと  
良寛顔兜太顔あり春炬燵  
恐竜の骨も秋なる傾ぎかな  
餓死戦死自死も不明も敗戦忌  
朝顔の覗く教室一年生  
筆太の兜太の一字敗戦忌  
老人も大魚も強し雲の峰  
洗つても炊いても真白今年米  
孫四人担ぐ骸に大西日  
好きな子と距離縮まらぬ踊の輪  
床下の土鍋戸棚へ冬支度  
哀しみは引きては寄せる霧の川  
ブレンドの冬日の薰り過去のひと  
タクト上げ少年の夏極まりぬ  
新緑の風を巻き込む逆上がり  
幾千のひまはり覆ふ休耕田  
貨物車を数へる癖や水温む  
いつまでも男は子供いぬめぐり  
向日葵の戦士の如く立つ曠野  
白扇を閉ぢ齒切れ良き江戸言葉

0 0 9 1  
0 0 9 2  
0 0 9 3  
0 0 9 4  
0 0 9 5  
0 0 9 6  
0 0 9 7  
0 0 9 8  
0 0 9 9  
0 1 0 0  
0 1 0 1  
0 1 0 2  
0 1 0 3  
0 1 0 4  
0 1 0 5  
0 1 0 6  
0 1 0 7  
0 1 0 8  
0 1 0 9  
0 1 1 0  
0 1 1 1  
0 1 1 2  
0 1 1 3  
0 1 1 4  
0 1 1 5  
0 1 1 6  
0 1 1 7  
0 1 1 8  
0 1 1 9  
0 1 2 0

丸呑みのトマト駝鳥を膨らます  
嘴や一瞬にして蟬の黙  
病窓の手を振る吾子よ蟬の坂  
父と子の背丈を足して捕虫網  
監督のサイン真っ直ぐ風五月  
家々にマンゴー育て島の唄  
円顔の喜寿となりけり石鹼玉  
原爆忌茄子に空の映りゐる  
おでん屋のアイスなめなめ夏の暮  
門前に蟬とる子あり喪中の日  
花火咲く医療従事者へのエール  
氷結音夫の介護のねむれぬ夜  
吉野には鬼のようなる桜さく  
退院の窓に岩木峰今朝の秋  
春水へ麒麟の首の伸びにけり  
合掌造りへと雪踏む郵便夫  
原色のごつた返して夜店かな  
一トンの実梅を漬けて妊れり  
羽拔鶏新しき鬩つくりけり  
八月大名ドライアイスを抱いて寝る  
土用波遺骨といふも石一つ  
犬猿の仲半世紀山笑ふ  
無音なる唐古遺跡や夏の草  
晚夏光雲の流れは変はりをり  
水売の日暮れてもなほ靡く旗  
野分の夜トランヂスタの歌謡曲  
ハモニカを下手に吹く子も春に入る  
雪国の雪あたらしく朝が来る  
春愁やうすむらさきのランドセル  
無造作にジーンズを着て秋に入る

0 1 2 1 貨車軋み線路は錆びぬ竹煮草  
 0 1 2 2 ゴッホにはゴッホの帽子麦畑  
 0 1 2 3 猪狩へ紀州の犬の白きかな  
 0 1 2 4 人日やいつかひとりとなる夕べ  
 0 1 2 5 とうきびの迷路や子等の声弾け  
 0 1 2 6 刻苦せし満濃池の田水引く  
 0 1 2 7 一匹の蟻見てをれば蟻の道  
 0 1 2 8 蚊帳吊つて一人早寝の母なりし  
 0 1 2 9 さらさらと肌に触れて浴衣かな  
 0 1 3 0 向日葵を見て回りたる棚田守  
 0 1 3 1 蟬時雨畳にしばし仮まくら  
 0 1 3 2 窯の火の業火のごとし走り梅雨  
 0 1 3 3 折鶴の色褪せにける盃蘭盆会  
 0 1 3 4 筍の気骨の反りを掘り上げし  
 0 1 3 5 サージカルマスク水田を漂流す  
 0 1 3 6 検温機自動照準原爆忌  
 0 1 3 7 草刈の俺が死んだるあとのこと  
 0 1 3 8 鶏頭花五人の親を終ひけり  
 0 1 3 9 象潟の島を残して青田波  
 0 1 4 0 雲の峰子の描く母はいつも笑み  
 0 1 4 1 夏祓やさしくぼかす左眉  
 0 1 4 2 海神へ流す七夕飾りかな  
 0 1 4 3 広島の命の数の蟬の穴  
 0 1 4 4 遠くまで見送る父の盆の舟  
 0 1 4 5 蛇の衣餓鬼大将の宝物  
 0 1 4 6 行く年の傾くままの道標  
 0 1 4 7 逆縁の入学前の骨拾ふ  
 0 1 4 8 一枚の島の卒業証書かな  
 0 1 4 9 窓拭きの冬青空の命綱  
 0 1 5 0 被爆樹の命の数の木の芽かな

泣くやうに喪あけの髪を洗ひけり  
0 1 5 1  
八月の言葉のやうな水の泡  
0 1 5 2  
世界新記録のゴール風光る  
0 1 5 3  
水槽の命の数の原爆忌  
0 1 5 4  
泣くやうな忘れるやうな風の盆  
0 1 5 5  
地球より重き命の水馬  
0 1 5 6  
連れ歩く影も見送る風の盆  
0 1 5 7  
露寒し車の下に親子猫  
0 1 5 8  
島国に遠き島々ありて冬  
0 1 5 9  
産土に深き一礼帰省の子  
0 1 6 0  
アクリル板隔て逢瀬のソーダ水  
0 1 6 1  
冬木立ハスキー犬は風の如  
0 1 6 2  
行き合ふと言ふ語感あり日の盛  
0 1 6 3  
母の日の母でいること難かしく  
0 1 6 4  
少年の小部屋の小窓山開  
0 1 6 5  
木の実降る少年院の賢治祭  
0 1 6 6  
少年の拳のゆるむ猫じやらし  
0 1 6 7  
ほめるでも叱るでもなく母涼し  
0 1 6 8  
翡翠の水晶体のその刹那  
0 1 6 9  
百日紅何も話せぬ口漱ぐ  
0 1 7 0  
聞き役にいつしかなるや時鳥  
0 1 7 1  
死の話生きる話や敬老会  
0 1 7 2  
行く道や木の葉隠れに秋の山  
0 1 7 3  
桃剥いて夜の雲ほぐれやすきかな  
0 1 7 4  
栗拾ふ後ろの夕日誰も見ず  
0 1 7 5  
しめり灰かけて囲炉裏を鎮めけり  
0 1 7 6  
被ひたる白鉢巻に登山せり  
0 1 7 7  
碇星上げて糺らるる鰯太し  
0 1 7 8  
巡り来て膝の笑へる花の山  
0 1 7 9  
つぎつぎと子猫銜へて廃屋に  
0 1 8 0

0 1 8 1  
0 1 8 2  
0 1 8 3  
0 1 8 4  
0 1 8 5  
0 1 8 6  
0 1 8 7  
0 1 8 8  
0 1 8 9  
0 1 9 0  
0 1 9 1  
0 1 9 2  
0 1 9 3  
0 1 9 4  
0 1 9 5  
0 1 9 6  
0 1 9 7  
0 1 9 8  
0 1 9 9  
0 2 0 0  
0 2 0 1  
0 2 0 2  
0 2 0 3  
0 2 0 4  
0 2 0 5  
0 2 0 6  
0 2 0 7  
0 2 0 8  
0 2 0 9  
0 2 1 0

栽培は傾斜地多し青みかん  
雲海の遅々促々と嶺を呑む  
ふる里の井戸に潮さすつりかな  
おのが影歪め鈍曳く採氷夫  
計りごとあるかに妖し月夜茸  
かなかなや耕す為の手を洗う  
赤紙を知らずに老いて終戦日  
生きてゐる限りを学び稲の花  
ワンサイズ上の制服囁れり  
箱釣の触れ合ふ肩や高嶺星  
鎌胼胝の手をひるがへし踊りけり  
着膨れて肩割り込ます屋台かな  
風に乗りプールの子らの笑ひ声  
アフガンの瓦礫の山や菊根分  
夫癒えし今朝を白露と気づきたる  
温め酒命の底のどこか鳴る  
水打つてこの町の香を立てにけり  
エコバッグより柚子の香の文庫本  
生きてますのみの返信熱帯夜  
会えぬ間に声変りして卒業す  
少女へと羽化し艶めく素足かな  
闇を来て闇に還りぬ虫の声  
黙禱の一分の奥秋の声  
齢なんぞ只の数字さ初仕事  
人もまた穀象虫の一種かな  
かなぶんぶん洗濯物に付いて来し  
晩秋やルーペ眼鏡の指紋跡  
魂迎へ昨日と同じ星出でて  
夕立のみな側溝へ吸はれゆく  
モボモガと呼ばれし人よ夏帽子

0 2 4 0	0 2 3 9	0 2 3 8	0 2 3 7	0 2 3 6	0 2 3 5	0 2 3 4	0 2 3 3	0 2 3 2	0 2 3 1	0 2 3 0	0 2 2 9	0 2 2 8	0 2 2 7	0 2 2 6	0 2 2 5	0 2 2 4	0 2 2 3	0 2 2 2	0 2 2 1	0 2 2 0	0 2 1 9	0 2 1 8	0 2 1 7	0 2 1 6	0 2 1 5	0 2 1 4	0 2 1 3	0 2 1 2	0 2 1 1
新涼や伐り倒したる檜の香	桜降るいつか地層の一枚に	訝する黒部溪谷秋深し	朝顔の路地の戦中戦後かな	日曜の夜に始まる虫の秋	商店街短かくなつて秋祭	指揮棒に声を集めて春を待つ	招福の鐘強く撞き春立てり	ほろ酔ひに愛でてたのしき星月夜	新涼やラジオ体操怠らず	玄能をもて割られたる胡桃かな	沈黙の一分重し原爆忌	もてなしは女将の所作よ夏館	満月のうらに快楽のような闇	傷癒やすように老いたし誘蛾灯	朝顔に一時帰宅の窓ひらく	蛍の夜源氏平家の本を買う	サングラス外せば街はがらんどろ	この地球宿題多し茄子の花	朝焼の海に出船の灯が灯る	石段の影立ち上がる広島忌	揚雲雀鋏持つ二人小さくなり	花冷えねと妻の一言朝茶汲む	遠ざかる日傘を追ひし神楽坂	朝日浴び鮎の友釣り彦根城	原爆忌子らが輪になる空になる	蟬の殻小犬が食つてしまひけり	漢には大義名分星月夜	あの世から飛び火のやうな曼珠沙華	店先の桃ていねいに置かれをり

0 2 4 1 蟬しぐれ池に傾く大きな木  
 0 2 4 2 桑実る養蚕棚の残る村  
 0 2 4 3 キッチンカー去りて轍に蟻の列  
 0 2 4 4 梅雨雲に蓋された町猫歩く  
 0 2 4 5 母は子を子は母を抱き敗戦日  
 0 2 4 6 雲の峰圧しの一手が功奏す  
 0 2 4 7 畑にまだ人ゐて釣瓶落しかな  
 0 2 4 8 仇討の眼吊り上げ菊人形  
 0 2 4 9 淑気満つ魚板の一打また一打  
 0 2 5 0 喝采のごとき潮騒夏近し  
 0 2 5 1 喪主の座をおりて帯解く夜の秋  
 0 2 5 2 飯の世に未練の少し鰻食ぶ  
 0 2 5 3 先行句判明のため、予選通過を取り消しました。  
 0 2 5 4 帰省子に勇んで勿ねる鯛の首  
 0 2 5 5 初産の山羊の鮮血春の雪  
 0 2 5 6 長雨の雲割れはじめ赤とんぼ  
 0 2 5 7 雲の峯暮色迫りて鳥の去ぬ  
 0 2 5 8 レシートに武器のお値段水鉄砲  
 0 2 5 9 司令邸見下ろす坂を七五三  
 0 2 6 0 妻もまた古き逸品年新た  
 0 2 6 1 月に人立ちし日なりや田草取  
 0 2 6 2 夫知らぬ妻の初恋夜の秋  
 0 2 6 3 夕端居母は真水のやうにをり  
 0 2 6 4 炭酸の泡を見てをり台風来  
 0 2 6 5 三婆となりて姉妹の十三夜  
 0 2 6 6 盆の月酔うて石狩挽歌かな  
 0 2 6 7 アイロンの余熱のやうな老の春  
 0 2 6 8 トランプを切る音速し夏燕  
 0 2 6 9 湯あがりの黒髪匂う夕端居  
 0 2 7 0 零れ種一氣に芽吹く藍畑

0 2 7 1  
0 2 7 2  
0 2 7 3  
0 2 7 4  
0 2 7 5  
0 2 7 6  
0 2 7 7  
0 2 7 8  
0 2 7 9  
0 2 8 0  
0 2 8 1  
0 2 8 2  
0 2 8 3  
0 2 8 4  
0 2 8 5  
0 2 8 6  
0 2 8 7  
0 2 8 8  
0 2 8 9  
0 2 9 0  
0 2 9 1  
0 2 9 2  
0 2 9 3  
0 2 9 4  
0 2 9 5  
0 2 9 6  
0 2 9 7  
0 2 9 8  
0 2 9 9  
0 3 0 0

はやぶさや翼休めし高層階  
ひよつこりと来そうな友よ夏の星  
梅雨深し机にひろぐ不器男の句  
オリンピック遠くに真鴨生まれけり  
また一つしがらみ脱いで更衣  
つくつくし心音たかきかくれんぼ  
夕かなかな母の御胸に戻りたき  
フレンチの鎌倉野菜冬日和  
春光を蹴散らしながら下校の子  
初版本の頁めくれば秋の声  
疫の世にひびけよ手話の卒業歌  
先生と連弾をして夏終る  
庭番の犬の背中に牡丹雪  
カーテンにリズムのありて秋の風  
消しゴムの汚れをけづり秋のこゑ  
夕焼のかけら残して海くるる  
一番の母似は三女盆の来し  
夏本番入道雲や沸きに沸き  
炎天の島鮮烈に夕日落つ  
鎌研いで青葉しずくの中に入る  
黒猫の瞳に映える月の影  
片栗の花のあかるき山路かな  
ただ歩くだけの日課や花は葉に  
ダムとなる村の鎮守や青葉木菟  
花とべら寄せ来るやうな島の星  
鯨尺に明治の日付茄子の花  
冬ごもり玄関あけて靴みがく  
パンデミック千年桜身じろがず  
吊したる筆の雫や秋はじめ  
無医村に生き存えて夕端居

0330	0329	0328	0327	0326	0325	0324	0323	0322	0321	0320	0319	0318	0317	0316	0315	0314	0313	0312	0311	0310	0309	0308	0307	0306	0305	0304	0303	0302	0301
病室の変らぬ景色すでに秋	ゴーギャンを観て炎天を帰りゆく	白き布白くたたんで夕涼し	秋暑く沖に尾をひくアンタレス	枯菊を焚いて大地へ返しけり	行く末や風のなすまま花芒	武蔵野をつんつんと往く赤とんぼ	身ほとりがうすむらさきに昼寝覚	床上げの母の寝所の蛍籠	ミヤンマーに空爆のあり桜餅	青春の蹉跎の音やラムネ玉	色街の名のみ残りし秋扇	板チョコを二枚忍ばせ送り盆	落蟬の骸は雨に打たれけり	一息に笛吹くごとくかなかなかな	菜の花忌けふ映写機の空回る	灯の下の夜なべの妻の鼻めがね	ふる里を捨てし子の服案山子着る	蟻の巣に似たる地下鉄出入口	堀越しに挨拶かはす花木槿	蜩の鳴き声入る勝手口	空前の水位も朝のとんぼかな	春雪や石の人魚は海に向く	船長の写真難値の初鰹	花火果て暗い方へと帰りけり	白き蝶飼育室より舞い上がり	農具市マッサージ機を試しけり	万華鏡回して春に組み替える	しつとりと熱る干梅うら返す	芋茎剥く五百余本の灰汁指に

0 3 3 1  
0 3 3 2  
0 3 3 3  
0 3 3 4  
0 3 3 6  
0 3 3 7  
0 3 3 8  
0 3 3 9  
0 3 4 0  
0 3 4 1  
0 3 4 2  
0 3 4 3  
0 3 4 4  
0 3 4 5  
0 3 4 6  
0 3 4 7  
0 3 4 8  
0 3 4 9  
0 3 5 0  
0 3 5 1  
0 3 5 2  
0 3 5 3  
0 3 5 4  
0 3 5 5  
0 3 5 6  
0 3 5 7  
0 3 5 8  
0 3 5 9  
0 3 6 0

水彩の絵よりも淡く蟬生る  
氷瀑に打ち込むハーケン劔せり  
寂光院のまだ生臭き蛇の衣  
北斎の波をサーファーまっさかさま  
研ぐ鎌に匂ふ昭和や秋夕焼  
居酒屋を一足出づる余寒かな  
踊の輪踊らぬ人の輪が囲む  
挨拶に魚の来ると能登の海女  
弦月やひとり老いゆくニュータウン  
紫蘇の実を扱くこの世に長居せり  
柿ひとつ道にころがる日和かな  
せきれいの腹に朝日の紅がさし  
春光や食後の座睡逆らわず  
火蛾とぶや万国橋の屋形船  
瑠璃揚羽風の奈落のありにけり  
茅舎忌のサラダにパセリ青々と  
新緑をたっぷり吸って風となる  
父の日の父の寝顔を見ておりぬ  
終戦日朝餉の匂ひ漂ひ来  
しみじみと残されしことさみだるる  
青空のつづく安らぎ雀の子  
紙漉や水にもありぬ表裏  
描いて詠み読みては書いて獺祭忌  
おんぶばつた子ではなきもの負うてをり  
霜の朝手持無沙汰の休刊日  
初旭場末の路地を輝かす  
調教に育つ馬体や花は葉に  
新米や文にときをり国言葉  
冷ややかやなぜにこんな不発弾  
小流れに落ちて木の葉の舟となる

0361 岳人のムーミン谷と呼ぶ花野  
 0362 数式を解く老僧や桃の花  
 0363 帰省子に星千個ほど足しておく  
 0364 もがきつつ蟻あるるいまを蟻  
 0365 干し竿のタオルの先に天の川  
 0366 少年のキャッチボールや鰯雲  
 0367 梅の実を黙々選りて祖母の昼  
 0368 神名備の山に初雁迎へけり  
 0369 勢ひ水浴びて荒ぶる神輿かな  
 0370 翁媪の飲食しづか雁渡し  
 0371 漢の倭の金印の鳥雁わたる  
 0372 浦百戸あげての勇魚供養かな  
 0373 春泥を飛びこえてゆくランドセル  
 0374 沢音の時をり高し青胡桃  
 0375 手火花を点して深き背なの闇  
 0376 日向ぼこ祖母に教はるまつりぐけ  
 0377 大声の母は百歳秋の峰  
 0378 寄り添ひて秋雲仰ぐ老夫婦  
 0379 蓮池の木道を行く乳母車  
 0380 神鶏の檻にも掛けて秋簾  
 0381 摘果して青柿風に日に育つ  
 0382 青麦や祖母山へ向く畝の筋  
 0383 遥かより松明見ゆる里神楽  
 0384 素のままに生きて半寿や居待月  
 0385 人の世を逆らって生き草を引く  
 0386 最後とは思はず母と庭花火  
 0387 身に入むやノートに遣る母の歌  
 0388 疫やむを願ふ地藏の赤マスク  
 0389 松ぼくり蹴る少年の反抗期  
 0390 櫓や机上に夫の住所録

0 3 9 1 熱爛や病歴あかす腹の傷  
 0 3 9 2 晩夏光履くことのない登山靴  
 0 3 9 3 沛然のなかを毅然と白菖蒲  
 0 3 9 4 啓蟄や岩屋に舐める種麴  
 0 3 9 5 蟬の子は耕やすやうに樹へのぼる  
 0 3 9 6 ただならぬ気魄の櫛歌留多会  
 0 3 9 7 「嫁もらへ」母にじりよる盆休み  
 0 3 9 8 炎帝をいつ喝しての外の作業  
 0 3 9 9 迎火や通りすがりの子の問へり  
 0 4 0 0 逝く時は夢みるやうに昼寝して  
 0 4 0 1 夢殿に明日香の風や暮の秋  
 0 4 0 2 溪谷へ迫り出す崖に照葉かな  
 0 4 0 3 疫の世に一つ歳とる早星  
 0 4 0 4 鎌研ぎて西日にかざす原爆忌  
 0 4 0 5 葡萄棚一房ごとの小宇宙  
 0 4 0 6 墓地多き坂の里なり虫時雨  
 0 4 0 7 ライダーの一団止まる秋赤城  
 0 4 0 8 親の名をそのままつけて飼う仔猫  
 0 4 0 9 東京の夏飲み込んで夜行バス  
 0 4 1 0 みちのくや街道ごとの新走り  
 0 4 1 1 流れ星山猫軒のドア開ける  
 0 4 1 2 我が影を入れて片蔭膨らめる  
 0 4 1 3 初秋や仮漆の香強き家具工場  
 0 4 1 4 保育器に眠る双子や春の雪  
 0 4 1 5 朝顔に青増す空や夜勤明  
 0 4 1 6 生涯を一塗装工鰯雲  
 0 4 1 7 蟬時雨息柔らかく吾子眠る  
 0 4 1 8 もういいよ言い切る母の秋深し  
 0 4 1 9 欽の柄に父の艶あり十三夜  
 0 4 2 0 蟬がやむたび村が過疎になる

0 4 2 1  
0 4 2 2  
0 4 2 3  
0 4 2 4  
0 4 2 5  
0 4 2 6  
0 4 2 7  
0 4 2 8  
0 4 2 9  
0 4 3 0  
0 4 3 1  
0 4 3 2  
0 4 3 3  
0 4 3 4  
0 4 3 5  
0 4 3 6  
0 4 3 7  
0 4 3 8  
0 4 3 9  
0 4 4 0  
0 4 4 1  
0 4 4 2  
0 4 4 3  
0 4 4 4  
0 4 4 4  
0 4 4 5  
0 4 4 6  
0 4 4 7  
0 4 4 8  
0 4 4 9  
0 4 5 0

母となる娘の便り桃の花  
楽譜など要らぬ児どもの祭笛  
外燈へ闇引つ張り来兜虫  
着崩れぬ明治の祖母や春暑し  
春の雪牝鹿の鼻に降るは消え  
少年の憂ひ春愁より重く  
雲海やリュックを下ろす肩の小屋  
稲妻の瞬時に曝す闇の奥  
墓洗ふ詮ない言葉かけもして  
甘えたい人は遠くにアマリリス  
恋猫にステイホームを諭しけり  
春蘭の一輪残る前頭葉  
子の何故は未来の宝文化の日  
新藁を軽く叩きて牛の寝屋  
母の手や濡れてゐてなほ暖かし  
短夜の眠りなをして夫の夢  
二世紀の大樹七日の蟬の声  
老農の面はれやか稲田風  
のどぐろの日干し炙りてビールかな  
マスク取り深呼吸して酷暑かな  
月祀る青き地球の点に住み  
ゆるやかに今日を閉ぢたる花芙蓉  
芋の露ころりと風がさらひけり  
蕎麦の花鄙の暮色を近づけず  
町が消えきのこの森のユートピア  
烏瓜咲いて闇夜を醸しけり  
夕立や土の匂いの雨の音  
波音と温め酒や島泊り  
秋冷や露頭の著き散策路  
櫓伸ぶ農夫湯治の無精髭

0 4 8 0	0 4 7 9	0 4 7 8	0 4 7 7	0 4 7 6	0 4 7 5	0 4 7 4	0 4 7 3	0 4 7 2	0 4 7 1	0 4 7 0	0 4 6 9	0 4 6 8	0 4 6 7	0 4 6 6	0 4 6 5	0 4 6 4	0 4 6 3	0 4 6 2	0 4 6 1	0 4 6 0	0 4 5 9	0 4 5 8	0 4 5 7	0 4 5 6	0 4 5 5	0 4 5 4	0 4 5 3	0 4 5 2	0 4 5 1
磐座の陰を残して雪間草	神の声全山響く那智の滝	風花の光舞ひたる薄日かな	家康やなんじゃもんじゃの花盛り	青田風ふるさとよりも永く住み	小巾刺しのこる山里稲の花	鷹よぎる伊吹風の白き朝	父と子に舟を待つ間の穴惑	芭蕉の風入るる書斎や秋燕忌	あどけない空の青さや花野道	顔文字の喜怒哀楽や卒業す	鉛筆の芯の尖りて秋出水	樺美智子忌書き込みにじむ文庫本	星流る生きとし生けるもの変異	空までもゆらしてゐたりハンモック	即答はできぬ上布の腕組んで	駅員の差す指ますぐ今朝の秋	地平這ふメコンデルタの稲光	時雨ふる酒田に敏雄の句の陶板	宇宙旅行ガイドに付箋夏休み	人に会はねば白服の白きまま	秋出水雁木五段をしぶく波	朝風やフェリーゆつくり接岸す	消しゴムを使わなくなり文化の日	古扇内輪話をのせてをり	やは肌の茄子の雫の紫紺なり	新米にまづ手を合はす生身魂	畦に立つ白鷺の密十四五羽	あさがほや廃校は今ワイナリー	サーファーは北斎の波駆けあがり

0 4 8 1	早瀬にはみどり映らず河鹿笛
0 4 8 2	数珠玉や不意に恋しき母の声
0 4 8 3	とこしへに積もることなし海の雪
0 4 8 4	朝練のカヌー漕ぐ声葦の角
0 4 8 5	うぐひすに雑木一叢刈残す
0 4 8 6	朝涼や児の佳きこゑは珠のごと
0 4 8 7	地球儀の日本真つ赤酷暑来る
0 4 8 8	関節で繋がるからだ盆をどり
0 4 8 9	偶に掛けしベンチの露しとど
0 4 9 0	あおの透く天の色なる蟬生る
0 4 9 1	眼前に命たぎらす朝の滝
0 4 9 2	駅ピアノ遠巻きにして夜学生
0 4 9 3	凧や死者名新宿100番男
0 4 9 4	家康の城址にチャペル秋の空
0 4 9 5	萩の風五百羅漢の眩やきぞ
0 4 9 6	帰り来て踊子となるワンピース
0 4 9 7	椿寿忌や二十五円の「ホトトギス」
0 4 9 8	露の世やひとり住まひて鍵ひとつ
0 4 9 9	反抗期過ぎれば優し野分晴
0 5 0 0	朝霧の湖より湧けり嘶けり
0 5 0 1	夕日受く白詰草の音符かな
0 5 0 2	十年の声の渦あり春の海
0 5 0 3	澄む空のその澄む光稲の花
0 5 0 4	首垂るる回転木馬梅雨に入る
0 5 0 5	初雪の吐息ひとつの軽さかな
0 5 0 6	簡単服ましろ臨月迎へけり
0 5 0 7	朝涼や物みな常の位置にあり
0 5 0 8	林檎むく妻の銀髪光る朝
0 5 0 9	蛸や竹林擦り抜けて微震
0 5 1 0	巢ごもりは壕よりステキ敗戦忌

0540	0539	0538	0537	0536	0535	0534	0533	0532	0531	0530	0529	0528	0527	0526	0525	0524	0523	0522	0521	0520	0519	0518	0517	0516	0515	0514	0513	0512	0511
稲穂波秩父嶺雲をはらひけり	天地に沁みるムツクリ冬落暉	岬といふ山裾へ冬に入る湿原	葎わつと黄金の秋ぞ隠り沼も	昼顔や風待ち港の郭跡	蛙合戦一茶の里の闇重く	小包の底にメインの秋茄子	一人分ポット沸く間の虫かすか	虫の音に引いてもらひし眠りかな	暁光の中保線夫の息白し	おちよぼ口して晴れやかに牡丹かな	八面山色を濃くして冬に入る	まとまらぬ二百十日の頭かな	夏の果夕日はもののにほひ消し	今伸びるための発熱草の息	捨て猫の器量にほれてハンモック	それぞれの桃の剥き方核家族	譲り合ふシルバート初景色	結願や高野涼しき奥の院	虫の音を肴に酒の銘問はず	秋天の青を嵌め込み黒部ダム	搾乳の乳房脈打つ寒九かな	はまなすや海うらまざるにくまざる	散らずして老いゆくばかり紫陽花は	海へ向く棚田千枚秋夕焼	一湾の鋼光に稲熟るる	しろがねの刻の流るる虫時雨	送り火の果てたる闇に遺さるる	紛れなき父郷の山河青き踏む	床の間に伏せしグローブ夏を待つ

0 5 4 1 木の实降るブルーシートの屋根のまま  
 0 5 4 2 海女の浮くたびに広がる鰯雲  
 0 5 4 3 語り部の黙の語りぬ原爆忌  
 0 5 4 4 懐剣を胸に母逝く蛍の夜  
 0 5 4 5 鳥つぶて葎を焼く火を搔いくぐる  
 0 5 4 6 ひとつだけ十字架の墓菊の寺  
 0 5 4 7 南天のひそかに咲いて盛りなり  
 0 5 4 8 野の草の色のなかから青蛙  
 0 5 4 9 画用紙に一本の線燕来る  
 0 5 5 0 ビニールにも厚さ重さや梅雨湿り  
 0 5 5 1 地球儀の北極海に春ぼこり  
 0 5 5 2 栗剝くに上手下手あり姉妹  
 0 5 5 3 原爆忌紙面を飾るメダリスト  
 0 5 5 4 かなかなや救命室の灯は消えず  
 0 5 5 5 柘榴割る火星の赤き大地かな  
 0 5 5 6 過ぎてはや夜道に次の遠蛙  
 0 5 5 7 花終へて水の寂しき菖蒲園  
 0 5 5 8 短日の西日へ向かい帰らざる  
 0 5 5 9 たんぼぼぼゲルニカの牛こちら向く  
 0 5 6 0 春隣医師の机の砂時計  
 0 5 6 1 翻るとき蛍火の青白し  
 0 5 6 2 日の丸の旗秋天まじりつけなし  
 0 5 6 3 麻酔醒めまどろむ夕の涼しかり  
 0 5 6 4 平凡を愛すと洩らす生身魂  
 0 5 6 5 山の蝶まだ陽が残る捨て畑  
 0 5 6 6 主亡き庭にてらてら柿たわわ  
 0 5 6 7 三日月と酌み交わしたき酒があり  
 0 5 6 8 時化てなお海の恵みや鯉起し  
 0 5 6 9 教室のランドセルより蟬の声  
 0 5 7 0 血液型胸に縫ひつけ入学す

0 5 7 1  
0 5 7 2  
0 5 7 3  
0 5 7 4  
0 5 7 5  
0 5 7 6  
0 5 7 7  
0 5 7 8  
0 5 7 9  
0 5 8 0  
0 5 8 1  
0 5 8 2  
0 5 8 3  
0 5 8 4  
0 5 8 5  
0 5 8 6  
0 5 8 7  
0 5 8 8  
0 5 8 9  
0 5 9 0  
0 5 9 1  
0 5 9 2  
0 5 9 3  
0 5 9 4  
0 5 9 5  
0 5 9 6  
0 5 9 7  
0 5 9 8  
0 5 9 9  
0 6 0 0

町の名は変はらずにあり法師蟬  
会ひに行き会ひに来られて敬老日  
草に草絡まり庭の夏終はる  
障子貼る母フェザーの刃啞へつつ  
真葛原闇に溶けこむ虫のこゑ  
男帯太刀差す如く秋扇  
慣れつこの野良着の膝で西瓜割る  
鈴虫の鈴の転げて自転かな  
晩鐘の名残うねりて余花の里  
銀漢を揺らし最終電車の来  
村中の虫の声援夜の素振り  
南瓜切る役あるうちは死ねられぬ  
さぎあしの祖母の文机盆の月  
ふたたびは戻れなき道蟻進む  
沼の辺の風のぬめりや迎へ梅雨  
釣舟草あふるる貴船瀬音たつ  
星涼しやはやは洗ふ嬰のもの  
水ばしやと潰れ噴水止まりけり  
幾つもの鎖場を経て夏の山  
一峰を両断の意気鴟高音  
ワクチンと株価高値と芒種かな  
金木犀一人静かに深呼吸  
群青の山の端かすか飛ぶ蛍  
烏交る磨崖の螺髪憚らず  
焼鯛酒肴にナザレのフアド酒場  
身も世もなきとはががんぼのさわぎやう  
冬晴の脚曲げられぬキリンかな  
初夢のクレオパトラのごときわれ  
砂洲の上の鴨の身震ひ尾に尽きぬ  
肘あげて膳を運びぬ夕月夜

0 6 0 1  
0 6 0 2  
0 6 0 3  
0 6 0 4  
0 6 0 5  
0 6 0 6  
0 6 0 7  
0 6 0 8  
0 6 0 9  
0 6 1 0  
0 6 1 1  
0 6 1 2  
0 6 1 3  
0 6 1 4  
0 6 1 5  
0 6 1 6  
0 6 1 7  
0 6 1 8  
0 6 1 9  
0 6 2 0  
0 6 2 1  
0 6 2 2  
0 6 2 3  
0 6 2 4  
0 6 2 5  
0 6 2 6  
0 6 2 7  
0 6 2 8  
0 6 2 9  
0 6 3 0

つばめ来る兜太の海の彼方より  
骨片にみな名のありて沖繩忌  
草笛の名手に娘嫁がせり  
地芝居の悪代官の父を斬る  
聚楽を護る七戸の生身魂  
獵犬のやうなロボット開戦日  
足音に鯉寄せて来る杜若  
稲雀影より先に一羽二羽  
月見草残して行きぬ墓仕舞い  
白靴や銀座赤坂六本木  
出棺の合掌長し蟬しぐれ  
終戦日太平洋の波しづか  
人の世の明るさ暗さ水母浮く  
つくつくし鳴くだけ鳴いてそれつきり  
葛咲くや生家にのこる野面積  
送り火や元の独りの床に就き  
新酒酌む猫も舐めたく膝に乗り  
田の神と並び稲刈る父母を見し  
雨音の近づく午後や草の花  
銀河近き池塘暁けゆく一波紋  
桃食みて世相ひととき忘れけり  
鋭角に割るる板チョコ寒の入  
六畳にをさまり切らぬ残暑かな  
まづ敢へて奴の夜店を通り過ぐ  
ひめむかしよもぎ無人の駅降りて  
人間は太り稲刈るコンバイン  
棚田百青水無月の水満てり  
吊し柿一番星の点りけり  
夕暮や白き光を月見草  
汽水湖の波たをやかや浮寝鳥

0 6 3 1  
0 6 3 2  
0 6 3 3  
0 6 3 4  
0 6 3 5  
0 6 3 6  
0 6 3 7  
0 6 3 8  
0 6 3 9  
0 6 4 0  
0 6 4 1  
0 6 4 2  
0 6 4 3  
0 6 4 4  
0 6 4 5  
0 6 4 6  
0 6 4 7  
0 6 4 8  
0 6 4 9  
0 6 5 0  
0 6 5 1  
0 6 5 2  
0 6 5 3  
0 6 5 4  
0 6 5 5  
0 6 5 6  
0 6 5 7  
0 6 5 8  
0 6 5 9  
0 6 6 0

余生とて変はらぬ夢や初蝶来  
年毎に広がる樹冠梅の花  
新涼や水面に映える金閣寺  
マドンナと呼ばれし母の敬老日  
無住寺や人待ち顔の寒牡丹  
江戸つ子を気取るあつさの一夜酒  
青春を語らぬ母の葉喰  
濁り酒しんそこ父は叩き上げ  
山の湯の客は三人秋澄めり  
とんぼうの止まりて羽を伏せにけり  
稲刈りて元の重さの地球かな  
パラリンピックいつかは出たい案山子かな  
アダン茂る摩文仁のガマに書き残す  
壇で米搗きしことあり稲の花  
へぼ胡瓜男は先に死にたがり  
農継ぎし子が褒められてゐる日焼  
黄落やカリヨン響く空青し  
秋澄むや太郎冠者追ふ声響く  
蚯蚓鳴く更地に間縄張られけり  
蜻蛉の影蜻蛉の止まる石  
浮浪雲あけびの綿毛光りをり  
ものの影が十六夜の蔭動かしむ  
耳遠き夫には聞こゆ秋の声  
戦災碑ひっそり洗ふ盆の雨  
孤にあらず子ども食堂冬晴れぬ  
ため池も銀箔なりし月今宵  
木犀の香の中逝きし父と母  
木犀や夫の額の広くなり  
好天をきざす岬の今朝の霧  
妻の顔映し代田を仕上げけり

0 6 6 1  
0 6 6 2  
0 6 6 3  
0 6 6 4  
0 6 6 5  
0 6 6 6  
0 6 6 7  
0 6 6 8  
0 6 6 9  
0 6 7 0  
0 6 7 1  
0 6 7 2  
0 6 7 3  
0 6 7 4  
0 6 7 5  
0 6 7 6  
0 6 7 7  
0 6 7 8  
0 6 7 9  
0 6 8 0  
0 6 8 1  
0 6 8 2  
0 6 8 3  
0 6 8 4  
0 6 8 5  
0 6 8 6  
0 6 8 7  
0 6 8 8  
0 6 8 9  
0 6 9 0

雨に伏し風にはぐされ稲実る  
五湖に浮く初冠雪の逆さ富士  
そこそこに貧しく生きて葦の花  
髪挟む耳の白さや秋の風  
赤紫蘇を煮出す厨の一日かな  
片蔭を拾ふ小路やケンケンパ  
父を看て梅雨の日暮を帰る坂  
居留地に残る教会白木槿  
花筏吹き寄せられて南無の声  
灯揺れ白魚の影生まれけり  
熱帯夜壕に爆音聞きしこと  
浄梵の炎真すぐに彼岸花  
老いらくの伸ししづやかに夜のプール  
つくづくと吾は父の子木の葉髪  
人恋ふは水脈の如くや秋の航  
教室の大そろばんや囀れり  
春耕す畦にはあちやん座らせて  
誠めに来し子とつくる散らし鮎  
窓はみな大正ガラス冬館  
対岸に人待つ渡し犬ふぐり  
満州を語らぬ翁花林檎  
背を向けし肩に触れたる藤袴  
鬼灯を鳴らした友の今いずこ  
願ひ事減りゆく齡秋深し  
移動スーパ―路地に冬至の灯をこぼす  
満月や会いたき人の顔になる  
満月や大河を前に天守閣  
座布団にあぐらの広き生身魂  
鳴き竜の天上よりぞ淑気満つ  
緑陰の妊婦同士やおなかに手

0 7 2 0	0 7 1 9	0 7 1 8	0 7 1 7	0 7 1 6	0 7 1 5	0 7 1 4	0 7 1 3	0 7 1 2	0 7 1 1	0 7 1 0	0 7 0 9	0 7 0 8	0 7 0 7	0 7 0 6	0 7 0 5	0 7 0 4	0 7 0 3	0 7 0 2	0 7 0 1	0 7 0 0	0 6 9 9	0 6 9 8	0 6 9 7	0 6 9 6	0 6 9 5	0 6 9 4	0 6 9 3	0 6 9 2	0 6 9 1
十月や絵皿に落とす空のいろ	むんむんと田風の湧きぬ稲の花	ママチャリに風の加勢や花菜道	秋冷や五重の塔の心柱	ラガー等の固きスクラム一步二歩	創作の虚構と作意冬の水	かなかなの声澄む終を羨しとも	八月の父は無言に粥する	春の服くるりと回り見せにけり	朝霜の強さを言ひつ野菜売る	箒目の寺門に揃ふ秋の暮	ふと口遊ぶ疎開地の盆の歌	寛解を得て爽籟は身の裡に	手習ひの筆の払ひや望の月	死に近き人の寝息や春の月	畦を来て連れのとんぼと別れたる	蚯蚓鳴く骨削る音半麻酔	朝霧やスパーカブの排気音	かなぶんぶん一夜の友の長つ尻	本籍も出生もここ水を打つ	掛稲の海を隠して村眠る	大屋根の向うは海ぞ雀の子	マスク洩る愛の言葉や焦れつたし	虫すだく思ひ出の底かき乱し	友の笑顔一番新酒酌む二番	矢を放つ刹那のしじま冬の空	玄関の明りにあきつ頻りなり	道標の杭をぐるりと蛇の衣	口笛はふるさと歌ひ草の花	遠目にも聞こし召したる芙蓉かな

0 7 2 1  
0 7 2 2  
0 7 2 3  
0 7 2 4  
0 7 2 5  
0 7 2 6  
0 7 2 7  
0 7 2 8  
0 7 2 9  
0 7 3 0  
0 7 3 1  
0 7 3 2  
0 7 3 3  
0 7 3 4  
0 7 3 5  
0 7 3 6  
0 7 3 7  
0 7 3 8  
0 7 3 9  
0 7 4 0  
0 7 4 1  
0 7 4 2  
0 7 4 3  
0 7 4 4  
0 7 4 5  
0 7 4 6  
0 7 4 7  
0 7 4 8  
0 7 4 9  
0 7 5 0

向日葵の迷路を抜けしおらび声  
玉音を知らぬ子と摘むすべりひゆ  
猫逝きてひとりの朝や秋の風  
湯をおとす音のくぐもる無月かな  
秋彼岸墓に生ふ草花つけて  
冬花火兜太来さうな秩父の夜  
山葡萄母の逃げ場の山の畑  
木綿地の灼けし日の丸文化の日  
星々の妍をきそひて夜干梅  
夫の忌を修しひとりの髪洗う  
桐箱に銀の耳搔き冴返る  
雪解けに磨かれてゐる村ひとつ  
会津富士雪の切つ先輝かす  
柿の花零るる様のわが庭よ  
青春のくすぶつて居る曝書かな  
絢爛の川越祭シシカバブ  
マチュピチュもベニスも好きと生身魂  
木の実落つ金子みすずの小鳥たち  
島小春電池で動くまねき猫  
黒潮の崖の一叢すいせんか  
擦れ違ひ互ひ見返る風の盆  
お使いに行つて来た子の頬冷た  
本堂や一語に和む夏期講座  
燕去ぬ潮目はるかに相模灘  
半地下の飲屋の明かり金魚玉  
口笛の父の機嫌や魚籠に鮎  
木下闇風は重たきものとなり  
豆腐売りラッパの音沁む秋夕焼  
小屋に着く多めの塩の焼岩魚  
跡継ぎと腹割らず老ゆ豆の花

0 7 5 1  
0 7 5 2  
0 7 5 3  
0 7 5 4  
0 7 5 5  
0 7 5 6  
0 7 5 7  
0 7 5 8  
0 7 5 9  
0 7 6 0  
0 7 6 1  
0 7 6 2  
0 7 6 3  
0 7 6 4  
0 7 6 5  
0 7 6 6  
0 7 6 6  
0 7 6 7  
0 7 6 8  
0 7 6 9  
0 7 7 0  
0 7 7 1  
0 7 7 2  
0 7 7 3  
0 7 7 4  
0 7 7 5  
0 7 7 6  
0 7 7 7  
0 7 7 8  
0 7 7 9  
0 7 8 0

白靴や湖東の八雲記念館  
万緑や古き棚田の蘇る  
彼の世とて一人は淋し万灯会  
バイク去る朝刊の香と鉦叩  
まだいける今朝の雪搔きダイエツト  
竹の春嵯峨の風曳く人力車  
岩に描く泡の造形波の華  
雪吊の最後の締めは風がなし  
糸の端青空にかけ女郎蜘蛛  
鱧の立つ鵜鮎塩焼き藻の匂ひ  
蚊遣火や生家昔の闇のあり  
青果より高値で売れるカブトムシ  
パラ水泳背に吸い玉の跡見えて  
軍歌だが反戦歌とも生身魂  
ぽとぽと夕立零し山下る  
手の会釈片蔭の道譲られて  
夏帽子白髪頭に似合ひけり  
だんだんと夢中になりて菜虫とる  
靴から出して見せたるひよんの笛  
草の実のつきし靴紐ほどきけり  
抱き上げて子に触れさする烏瓜  
外食の減りし家計や水温む  
梅見茶屋つむじ似てゐし親子かな  
自転車の前後に幼ひまはり黄  
河童忌の浦曲を灯し一輛車  
鮎落ちて峡は小雨に暮れゆけり  
ちちろ虫今宵も屋台の下ですか  
熊の棚残して尾瀬の小屋仕舞ひ  
コスモスの海駆け抜くる遅刻の子  
初電話待ちて箸取る二人膳

0 7 8 1  
0 7 8 2  
0 7 8 3  
0 7 8 4  
0 7 8 5  
0 7 8 6  
0 7 8 7  
0 7 8 8  
0 7 8 8  
0 7 9 0  
0 7 9 1  
0 7 9 2  
0 7 9 3  
0 7 9 4  
0 7 9 5  
0 7 9 6  
0 7 9 7  
0 7 9 8  
0 7 9 9  
0 8 0 0  
0 8 0 1  
0 8 0 2  
0 8 0 3  
0 8 0 4  
0 8 0 5  
0 8 0 6  
0 8 0 7  
0 8 0 8  
0 8 0 9  
0 8 1 0

煮凝やある日突然素の私  
花野道ゆきあひの雲流るるを  
冬蝶の風に掬われ一つ飛び  
虫さんはおともだちかな夜泣止む  
風に色なし硝子飛び散る交差点  
一人にも老いにも慣れて注連飾る  
外輪山越えて阿蘇より草の絮  
絶海の島を残して海猫帰る  
鯨船のへりに走りぬ昼鼠  
つる枯れに残る通草や口開けて  
おみくじを月に結はへてゐるところ  
飯館の村営書店虫すだく  
良寛に恋の話や月見草  
雨後の日のまばゆき河原蟻蛸とぶ  
色鳥や湖水みなぎる朝ぼらけ  
麓村かぎりなく晴れ落し水  
帰省子の湯加減までも父に似し  
炎昼の大道芸に小銭投ぐ  
黙食も作法のひとつ秋暑し  
小説は恋へ展開煖炉燃ゆ  
ソプラノの一声長し胡蝶蘭  
読み聞かす絵本も膝もあたたかし  
読初は兜太が一茶句集かな  
河童忌の雷雨はげしく停電す  
夕星や今年限りの落し水  
朝顔の静かに開く紺が好き  
一匙の新酒看取りの枕辺に  
紫陽花の升目埋めつつ咲き始む  
足跡に添ふ杖跡や原爆忌  
箒の柄もて描く土俵秋高し

0 8 1 1  
0 8 1 2  
0 8 1 3  
0 8 1 4  
0 8 1 5  
0 8 1 6  
0 8 1 7  
0 8 1 8  
0 8 1 9  
0 8 2 0  
0 8 2 1  
0 8 2 2  
0 8 2 3  
0 8 2 4  
0 8 2 5  
0 8 2 6  
0 8 2 7  
0 8 2 8  
0 8 2 9  
0 8 3 0  
0 8 3 1  
0 8 3 2  
0 8 3 3  
0 8 3 4  
0 8 3 5  
0 8 3 6  
0 8 3 7  
0 8 3 8  
0 8 3 9  
0 8 4 0

灯火親しむ飴色の下宿の間  
満月の降りくる光手で掬ふ  
早仕舞してそれぞれの夜長あり  
イベントの梯子車高く紅葉散る  
選手村あと蝸のもう鳴かず  
疫病禍を逃げて一人の大枯野  
一杯の水が嬉しい今朝の秋  
紫蘇を揉む妣似の太き五本指  
アンテナの傾いてをり威し銃  
枯葉舞ふ顔認証の販売機  
しあはせは絹莢の筋とる夕べ  
ふる里は代替りして盆の月  
秋の声手持ち無沙汰という空間  
だんじりは無観客の街走りけり  
身の内の鬼に豆撒く術のなく  
何もかも包む風呂敷春となり  
冷し瓜井戸にと母の置き手紙  
消えてゆく古地図の地名昭和の日  
後期高齢に反抗期ありアマリリス  
手繰りても手繰りても貧乏かずら  
笑ひたくなるほどに秋澄みにけり  
手のひらに青き空あり葛の花  
日は峽に笈してをり野紺菊  
背徳のネクタイ解き秋遍路  
菓子缶を針箱代り夜の秋  
白黒の残像となり燕去ぬ  
わが町のコンビニ今日は西瓜売る  
未接種の児の登校日芋の露  
「がまんだぞ」と山鳩のこゑ今朝の秋  
新涼やベンチに女子の野球帽

0 8 4 1  
0 8 4 2  
0 8 4 3  
0 8 4 4  
0 8 4 5  
0 8 4 6  
0 8 4 7  
0 8 4 8  
0 8 4 9  
0 8 5 0  
0 8 5 1  
0 8 5 2  
0 8 5 3  
0 8 5 4  
0 8 5 5  
0 8 5 6  
0 8 5 7  
0 8 5 8  
0 8 5 9  
0 8 6 0  
0 8 6 1  
0 8 6 2  
0 8 6 3  
0 8 6 4  
0 8 6 5  
0 8 6 6  
0 8 6 7  
0 8 6 8  
0 8 6 9  
0 8 7 0

石橋に昔の地名鳥渡る  
母の掌にのする飴玉小鳥来る  
長生きも一芸なりし翁草  
冬至くる全山襟を正しけり  
憲法記念日また別の雲が湧く  
尻に入る坐薬一弾原爆忌  
寒晴映すビルの窓は縦に拭くべし  
ジェットコースター今天辺に夏来る  
隻腕や声冴え冴えと籠手を打つ  
透きとほる身を震はせて蟬の羽化  
春嶺に卒寿と傘寿喜寿も居て  
帆柱の突つ込んでゆく卯波かな  
沼陰にとんぼ水打つ真昼かな  
午後五時に開ける校門夕桜  
中空のストップモーシヨンの落花  
平凡な名前のわたし夏のみ  
冬ぬくし十八歳のポチとゐて  
フラフラプてふ渦の中昭和の日  
八十八夜米寿の夫の農日誌  
首塚の辺りもつとも地虫出づ  
八月や読み込む五紙のひもすがら  
相寄りて終の二輪や秋さうび  
生き残る手立ていろいろ秋の草  
子燕や飛べるよろこび総身に  
草踏めばとびつく露と逃げる露  
迷ひごと晴れて初音をほしのまま  
鯉はねて野池の春を告げてをり  
秋薔薇や港眼下の異人墓地  
護衛艦湾を動かず敗戦日  
見送りしバスの尾灯や秋の雨

0 8 7 1  
0 8 7 2  
0 8 7 3  
0 8 7 4  
0 8 7 5  
0 8 7 6  
0 8 7 7  
0 8 7 8  
0 8 7 9  
0 8 8 0  
0 8 8 1  
0 8 8 2  
0 8 8 3  
0 8 8 4  
0 8 8 5  
0 8 8 6  
0 8 8 7  
0 8 8 8  
0 8 8 8  
0 8 8 9  
0 8 9 0  
0 8 9 1  
0 8 9 2  
0 8 9 3  
0 8 9 4  
0 8 9 5  
0 8 9 6  
0 8 9 7  
0 8 9 8  
0 8 9 9  
0 9 0 0

鈴虫や少し窓開け長湯せり  
敬老の日一人の老後看取りけり  
ラムネ玉飲む太陽を丸吞す  
星の降る那智の峰々鳥渡る  
月光へ死者の加はる風の盆  
妻恋しつくつくぼうしつくつくぼうし  
濁流に浸かりし稲穂刈りにけり  
秋夕焼気付かれず逝く友の葬  
津軽富士夕日に映えて林檎風呂  
樹の匂ひ土の匂ひや梅雨晴間  
引く波の光を残す秋の浜  
ポケットに常備薬ある花野かな  
持ち主の身罷られしといふ稲田  
星冴ゆる琥珀の中に眠る虫  
星月夜生家に残る外厠  
新涼や少し濃い目のお味噌汁  
ちりめんを着て秋風を纏ひけり  
雲間より日差し零るる師走かな  
船頭の船の障子を洗ひをり  
存へて流離の果ての星祭  
せみしぐれ一人で済ます一周忌  
父と張る防鳥網や鰯雲  
教室を迷ふ秋の蚊誰も打たず  
名月や心の尖り照らさるる  
千群れて千の静けさ秋茜  
和太鼓の撥秋天をすくと指し  
地卵のぬくもりを手に冬隣  
春うらら浦賀の渡船客一人  
一桁の文字あたたかき年賀状  
山々へ木霊還すや青嵐

0 9 0 1  
0 9 0 2  
0 9 0 3  
0 9 0 4  
0 9 0 5  
0 9 0 6  
0 9 0 7  
0 9 0 8  
0 9 0 9  
0 9 1 0  
0 9 1 1  
0 9 1 2  
0 9 1 3  
0 9 1 4  
0 9 1 5  
0 9 1 6  
0 9 1 7  
0 9 1 8  
0 9 1 9  
0 9 2 0  
0 9 2 1  
0 9 2 2  
0 9 2 3  
0 9 2 4  
0 9 2 5  
0 9 2 6  
0 9 2 7  
0 9 2 8  
0 9 2 9  
0 9 3 0

月煌々と考へる人の影  
カーテンのうしろの秋のけはひかな  
十年の鎮魂の日々草萌ゆる  
かなかなや胸につかへし母の声  
在りし日の面影立ちて秋彼岸  
ほんわかと向田邦子読む夜長  
封じ手を記す少年夏羽織  
母の背を越えて父の背夏休み  
秋蟬や夕暮なれば読経めく  
秋晴や小諸へ来たらこの店と  
兄の忌の卒塔婆三基や古酒の酔  
鯛を聞くひと時の無心かな  
炎天や勲八等と兵の墓  
村議会選挙間近や盆踊  
銀杏の根跨ぎで乱れ踊の輪  
雷鳥やダム放水のサイレン音  
足腰の労を多として大根引く  
AIの案山子が見張る通学路  
春の宵車窓に映るコロナ顔  
虫干しや吾が愚かさの借用書  
満月や灯を消して読む李杜の詩  
うそまこと相混ぜ辻の焚火かな  
遠泳の口へ氷砂糖のつぶ  
夏空に好きと落書して逃げる  
引越しの最後の最後金魚玉  
故里の一番ホーム秋燕  
少年に悪友ふたり鳥渡る  
ひたすらにコロナ禍逃れ花野行く  
金魚飼ひ晴耕雨読三年目  
人住まぬ庭に二本の萩の咲く

ひまはりのブーケ高々義足の娘 0931  
 待宵やコロナ日誌を書き終へて 0932  
 待ちくたびれて蜻蛉とすべり台 0933  
 白鳳の仏の笑みや初紅葉 0934  
 グランマの悲しい知らせりらの花 0935  
 容保の桜に会ひに帯締めむ 0936  
 花仕度幹は緋色の水の音 0937  
 どんぐりの落ちて下校の列乱す 0938  
 取り返しつかぬ過ち秋風鈴 0939  
 核心に触れし手応へ衣被 0940  
 やや保守に傾く余生ちちろ鳴く 0941  
 喋らねば言葉忘るる鳳仙花 0942  
 新涼や雲見るための遠眼鏡 0943  
 ボランティアの思い思いの夏帽子 0944  
 ふるさとの稲刈る風を受けにけり 0945  
 寝入るまで旅をしてゐる大銀河 0946  
 蜚金におのおの名島に朱夏 0947  
 しかたなくたんたと蛇穴に入る 0948  
 いつまでもそつとしておく烏瓜 0949  
 緑とはかくも麗し七日粥 0950  
 柿熟るる家一軒を囲みたり 0951  
 戦せぬと決めたる国の桜かな 0952  
 異界へと繋がるスマホきんぽうげ 0953  
 地球儀にひしめく国や虫すだく 0954  
 夏草や瞽女と遊女のゆきし径 0955  
 返却のレンタルベッド秋の雲 0956  
 雪をんな悲しむ母の貌となる 0957  
 長閑しやカレー匂へる集会所 0958  
 休耕田議論は尽きぬ寒雀 0959  
 禱り解きまた草を刈る沖繩忌 0960

0961 帰省子の父に供ふる新名刺  
 0962 酔ふほどに増す帰省子の国言葉  
 0963 西方に戦ありけり鱗雲  
 0964 溜息はつかぬ約束秋の薔薇  
 0965 引分けが村のならひの牛角力  
 0966 一漁村見下ろす駅舎花蜜柑  
 0967 冬薔薇告知受け入れねばならず  
 0968 下校児の触れゆく門の含羞草  
 0969 月光を手元に母の衣をほどく  
 0970 盆休みスマホで探す黄泉の国  
 0971 鬪牛の番付会議定まらず  
 0972 薬草の色濃き風呂や登山宿  
 0973 星月夜弦弾く時の眉うごき  
 0974 名月や地球にはある美し水  
 0975 かなかなや女の水仕きりもなし  
 0976 魂送り終へて一人の夕餉かな  
 0977 五本指ソックス穿いて敬老日  
 0978 爽やかや風鐸揺るる二月堂  
 0979 畦焼いて上着叩いて帰りけり  
 0980 焚き了へし窯の余熱や後の月  
 0981 夜の秋恋の詩に合う青インク  
 0982 塗りたての水彩画めく露葎  
 0983 ひと鳴きの猫に夜寒の来ておりぬ  
 0984 老いたりと言はせぬ扇ひらきけり  
 0985 八月の空より来たる葉書かな  
 0986 子に家計語る夕べや盆仕度  
 0987 夏の月砂の稜線女体めく  
 0988 父の日の父が弱音を吐いてをり  
 0989 公園の木馬を躲ししやぼん玉  
 0990 スケッチの椅子を展ぐる花野かな

1 0 2 0  
1 0 1 9  
1 0 1 8  
1 0 1 7  
1 0 1 6  
1 0 1 5  
1 0 1 4  
1 0 1 3  
1 0 1 2  
1 0 1 1  
1 0 1 0  
1 0 0 9  
1 0 0 8  
1 0 0 7  
1 0 0 6  
1 0 0 5  
1 0 0 4  
1 0 0 3  
1 0 0 2  
1 0 0 1  
1 0 0 0  
0 9 9 9  
0 9 9 8  
0 9 9 7  
0 9 9 6  
0 9 9 5  
0 9 9 4  
0 9 9 3  
0 9 9 2  
0 9 9 1

連弾の姉の横がほ緑さす  
親指と小指で測り編むセーター  
魂迎へ傘立にまだ母の杖  
自分史の大詰め近し木の葉髪  
競られゆく鱗眼力強きまま  
山々に醸す兜太の猿酒  
ごみ出しに来てかまつかの真紅  
水澄むや流るるものは影を連れ  
紫陽花の色づく前の色が好き  
河原鳩鳴く夕顔のひらくころ  
早ばやと蛇穴に入る疫の世  
ウイルスに喘ぐ地球や水澄める  
ちちろ虫明日出張の靴磨く  
こほろぎと闇分ち合ふ眠りかな  
海女小屋の暮れておしろい奔放に  
西瓜抱く赤子すつぽり抱くやうに  
あかんぼの足に母の名春の月  
大空へ日を返しをり次郎柿  
首里城の龍の下絵や囀れる  
蒼天をぐらりと揺らす捕虫網  
満月へ切絵のごとき観覧車  
春なれや紅茶に浮かすミントの葉  
本物の闇と狼ありし頃  
行く秋の改札に人滞る  
夜廻りの近づいて来る闇親し  
朝に聴き夕べに聴きて虫の秋  
暮れ早き裏山の道曼珠沙華  
高原に吹かれて増ゆる秋桜  
鷹の爪からくれなるを極めたる  
露の世に露ほどの生保ちつつ

1 0 2 1 父親を知らぬ子父の門火炊く  
 1 0 2 2 冬日向老いて大きな男の手  
 1 0 2 3 冬の朝空に歪みのなかりけり  
 1 0 2 4 白飯や朝日のように寒卵  
 1 0 2 5 地に還る日を見つづけ土雛  
 1 0 2 6 夕花野ゐのししつひに撃たれけり  
 1 0 2 7 名水を飲んできれいな汗の玉  
 1 0 2 8 麦笛の上手な兄も卒寿かな  
 1 0 2 9 魚焼くけむりの抜くる網戸かな  
 1 0 3 0 甚平着てローレックスの腕時計  
 1 0 3 1 都会つ子日焼子にして返しけり  
 1 0 3 2 波に乗り波に抗ひ流し雛  
 1 0 3 3 恋文は遺言書なり星月夜  
 1 0 3 4 終戦忌尊師は若き三代目  
 1 0 3 5 秋天に発破轟く石切場  
 1 0 3 6 遮断機のやうやく上る寒暮かな  
 1 0 3 7 大本営地下壕跡や霜柱  
 1 0 3 8 ゆつたりと含ませる墨自肅の春  
 1 0 3 9 藁塚や農に生まれて農に生く  
 1 0 4 0 ひぐらしや風にめくれる日記帳  
 1 0 4 1 土砂累累ウンボが浚ふ夏薊  
 1 0 4 2 伴走へ走者の鼓動炎天下  
 1 0 4 3 いつもの木大きく見ゆる朝の秋  
 1 0 4 4 王冠の月のしもべとなる夜かな  
 1 0 4 5 昼寝覚め生命線を見つめをり  
 1 0 4 6 遠き子へ胸いつぱいの秋思かな  
 1 0 4 7 田の水に満ちくる夕べ夏燕  
 1 0 4 8 秋風や渡御立ち止まる橋半ば  
 1 0 4 9 仕舞湯のへそに寄りきて冬至柚子  
 1 0 5 0 長き夜や付箋ばかりの古語辞典

1 0 5 1  
1 0 5 2  
1 0 5 3  
1 0 5 4  
1 0 5 5  
1 0 5 6  
1 0 5 7  
1 0 5 8  
1 0 5 9  
1 0 6 0  
1 0 6 1  
1 0 6 2  
1 0 6 3  
1 0 6 4  
1 0 6 5  
1 0 6 6  
1 0 6 7  
1 0 6 8  
1 0 6 9  
1 0 7 0  
1 0 7 1  
1 0 7 2  
1 0 7 3  
1 0 7 4  
1 0 7 5  
1 0 7 6  
1 0 7 7  
1 0 7 8  
1 0 7 9  
1 0 8 0

花ミモザ金の小鈴の鳴り止まず  
賑やかに集団下校豊の秋  
雪しろのなみなみ光る大河かな  
マスクして顔半分の盛夏かな  
敗戦の年表を読む春の雷  
妻は旅へ俺は草餅喰つてゐる  
初景色目にたつぷりと八ツ場ダム  
凍星のひとつは地球朗人亡し  
桜薬降る雲梯のそのままに  
先頭の教師草笛吹きにけり  
薄氷や鳩は素足で餌を探す  
十五夜やお捻り投げる藁箆  
干し物の犇めく鴨居さみだるる  
蟬生まる水と地球のあるかぎり  
一笛に闇の深まる薪能  
湧水は地球の吐息花山葵  
天高し島へ初めて架くる橋  
鬼の子やきのふと同じ服を着る  
神の手のとどく高さへ鷹柱  
コスモスや除染土囊の黒光り  
水打つて車椅子なる夫迎ふ  
病む夫に団扇の風を送りけり  
椿の実遺影の笑顔佳かりけり  
彼岸寺凡夫の撫でし太柱  
路線バス廃止の知らせ鳳仙花  
片陰や人生少し休もうか  
夕端居影絵のように妣の居る  
九十歳手際よく髪洗ひけり  
カップ麺啜る夜業の手に血豆  
カレーの香ただよう路地の文化の日

1 0 8 1 初紅葉人まばらなる尼の寺  
 1 0 8 2 アルバムの父の丸文字小鳥来る  
 1 0 8 3 犬の名で呼びとめらるる天高し  
 1 0 8 4 箒目に地下足袋の跡春の園  
 1 0 8 5 今もなほ呼ばれし屋号墓参り  
 1 0 8 6 ぶだう狩近鉄南大阪線  
 1 0 8 7 敬老の日や果物の皮長し  
 1 0 8 8 白まんじゆしやげならば旅立つ朝に欲し  
 1 0 8 9 二階まで老母押し上げ揚花火  
 1 0 9 0 蟬落ちて指差す子らの真顔かな  
 1 0 9 1 公園の遊具の増えて小鳥来る  
 1 0 9 2 一瞬の命の果ての梅雨滂沱  
 1 0 9 3 たうたうと田は水余す百千鳥  
 1 0 9 4 行き違ふ僧の合掌萩の花  
 1 0 9 5 待宵や蒼深めゆく桂浜  
 1 0 9 6 飛火野やまなざし優し孕鹿  
 1 0 9 7 語り部がとつぜん絶句原爆忌  
 1 0 9 8 これがかの蛇笏の折りしすすきかな  
 1 0 9 9 万緑や野良着の下の岩田帯  
 1 1 0 0 万屋に客ある小昼柿の花  
 1 1 0 1 真清水や林業見習ひ十九歳  
 1 1 0 2 ワクチンの接種日決まる梅雨最中  
 1 1 0 3 吾亦紅当麻の里の塔二つ  
 1 1 0 4 つもる雪またつもる雪妻の墓  
 1 1 0 5 父を追ふ子の月影や渚波  
 1 1 0 6 合歓の花ふはと未来に触れてをり  
 1 1 0 7 夏山や汽笛を父の声かとも  
 1 1 0 8 登高すおのが鼓動を頼みとし  
 1 1 0 9 遠き空まなこに映し檻の鷺  
 1 1 1 0 補陀落の海を鎮めて盆の月

1 1 1 1  
1 1 1 2  
1 1 1 3  
1 1 1 4  
1 1 1 5  
1 1 1 6  
1 1 1 7  
1 1 1 8  
1 1 1 9  
1 1 2 0  
1 1 2 1  
1 1 2 2  
1 1 2 3  
1 1 2 4  
1 1 2 5  
1 1 2 6  
1 1 2 7  
1 1 2 8  
1 1 2 9  
1 1 3 0  
1 1 3 1  
1 1 3 2  
1 1 3 3  
1 1 3 4  
1 1 3 5  
1 1 3 6  
1 1 3 7  
1 1 3 8  
1 1 3 9  
1 1 4 0

蓮の実の飛び再刊の絵本かな  
外湯へと下る銀河の麓村  
団栗拾ふ子にポケットを貸しにけり  
物に影たましひに影秋深む  
福ひとつふたつきようさん福袋  
棘もまたわたくしの性冬薔薇  
暗赤でも深紅でもなし冬薔薇  
重機繰る顔の泥干る晩夏光  
極彩色の凍蝶見てよりの無口  
とびきりの笑みあり桃をすすりし子  
ひらがなのやうに香のあり菊人形  
授かりし命の声や冬銀河  
月青く沈めて柱状節理かな  
言語聴覚士に素直な夫や秋気澄む  
こおろぎをそつと追い出し雨戸引く  
まつすぐな道に苛立つ炎天下  
三角の貌の諧謔いぼむしり  
喧騒の残りし夜のプールかな  
田植女や足を抜きつつ足を入れ  
ホームラン夕焼雲に吸ひ込まる  
千年の血潮溢すや滝桜  
飛び込んで美濃奔流の一尾たり  
夕刊のクイズ解けたり秋灯下  
仏飯はてんこ盛りなり蟬時雨  
溪水に拭ふ項や烏兜  
戦艦の魚礁となりて八月来  
大漁の鯛みすゞを想ひをり  
春夕焼トランペットの若者よ  
秋空と気の合つてゐる千枚田  
保育所の靴箱ひくし日脚伸ぶ

1 1 4 1  
1 1 4 2  
1 1 4 3  
1 1 4 4  
1 1 4 4  
1 1 4 5  
1 1 4 6  
1 1 4 7  
1 1 4 8  
1 1 4 9  
1 1 5 0  
1 1 5 1  
1 1 5 2  
1 1 5 3  
1 1 5 4  
1 1 5 5  
1 1 5 6  
1 1 5 7  
1 1 5 8  
1 1 5 9  
1 1 6 0  
1 1 6 1  
1 1 6 2  
1 1 6 3  
1 1 6 4  
1 1 6 5  
1 1 6 6  
1 1 6 7  
1 1 6 8  
1 1 6 9  
1 1 7 0

悔いに色あらばなに色髪洗ふ  
とりどりの風のよりそふ萩野かな  
自転車を押して歩くや終戦日  
虫時雨一步で止んで闇となり  
牡蠣フライ食めば火の味海の音  
花どきに酒の「七賢」もちて来る  
指先の赤とんぼごと歩き出す  
秋桜を折りて心の折られけり  
モノクロに撮られコスモス揺れざらむ  
真つ二つ大笑いするカボチャかな  
黄身に付く白き卵帯三鬼の忌  
添ひ給ふ上皇后の夏手套  
陶枕や我より若き父母に逢ひ  
金魚売己の影に桶を置き  
いのち有る限り現役種子を播く  
かなかなで起きひぐらして畑仕舞う  
公園に北風と吾子とボールと  
あと五人待合室に篝火草  
濁りなき空の青さや五段稲架  
奥飛驒のカミオカンデよ穴惑  
ひじき採り母の背中の見える距離  
八月のとぎれた父の日記帳  
闇を咬む剥き出しの蝙蝠の牙  
村老いてどこも雑草ある稲田  
ひまわりや背骨縮んでゆくばかり  
宿坊の軒に胡桃の二筵  
老輩の護る在所や蕎麦の花  
みかん摘む南予訛りとスワヒリ語  
酔芙蓉紅濃く付けて夫を待つ  
特攻の滑走路地や蜻蛉舞ふ

1 1 7 1	肩車好きな児連れて帰省かな
1 1 7 2	志貴生駒二上金剛大花野
1 1 7 3	海底に黙す水筒敗戦日
1 1 7 4	黙禱によぎる夏蝶現なり
1 1 7 5	無観客の競技場の灯星流る
1 1 7 6	つくつくし激し隣の棟上がる
1 1 7 7	ゲバ棒とデモの青春木の葉髪
1 1 7 8	秋の灯や勉強もせず恋もせず
1 1 7 9	秋の道小さき草には小さき花
1 1 8 0	蟪蛄はさみどりとなり風の中
1 1 8 1	降り出して本降りとなる萩の雨
1 1 8 2	花筏蟻が列して渡りおる
1 1 8 3	水澄みて且つ水音の澄みにけり
1 1 8 4	朝礼のみな立て膝や银杏散る
1 1 8 5	考への尽きたる蘆の枯れゆけり
1 1 8 6	祈りとは利他の心よ木槿咲く
1 1 8 7	山裏の隠し稲田の実りけり
1 1 8 8	白南風や球児の汗に校旗揺れ
1 1 8 9	初春のひかり船屋を抱きけり
1 1 9 0	雨音を傘に重ねて七変化
1 1 9 1	摘むほどにはるけさつの草の花
1 1 9 2	まるまつて眠るけものや天の川
1 1 9 3	反骨の白眉のびゆく野水仙
1 1 9 4	叩くたび舟べり響く鵜飼かな
1 1 9 5	鷹柱より点一つ迂り出づ
1 1 9 6	振り抜いて歩き出す打者天高し
1 1 9 7	秋雨や無人の駅に小さき書架
1 1 9 8	秋深む素直になれる服を買う
1 1 9 9	青柿のしずかに太る夜の呼気
1 2 0 0	遺品てふ花嫁衣装原爆忌

1 2 0 1 月光に鮎恍惚と落ちゆけり  
 1 2 0 2 名月や仰いで拜む老夫婦  
 1 2 0 3 はらからの老いて親しき花木槿  
 1 2 0 4 洗桶伏せて灯を消す十三夜  
 1 2 0 5 菊膾兄もおとも長寿眉  
 1 2 0 6 子を心配母を心配神の留守  
 1 2 0 7 松枯れて天牛今もキキと鳴く  
 1 2 0 8 焼夷弾が夏田焦がした日や遙か  
 1 2 0 9 蝮捕ったと早も二度目の農日誌  
 1 2 1 0 億年の地層むき出し夏燕  
 1 2 1 1 教会の日焼の豊波の音  
 1 2 1 2 島宮の蒔絵木枕草に露  
 1 2 1 3 秋晴やベース真白き試合前  
 1 2 1 4 海に向く漁村の暮石鳥渡る  
 1 2 1 5 送葬の犬の遠吠え秋深し  
 1 2 1 6 ホールインワン初冠雪の富士目指し  
 1 2 1 7 濁流へ身投げのように親ツバメ  
 1 2 1 8 虹の裏側に新しい養老院  
 1 2 1 9 旅芝居夏空一枚曇み発つ  
 1 2 2 0 雨戸閉め一日の終はる良夜かな  
 1 2 2 1 流星やでるはずのない電話する  
 1 2 2 2 海荒れて金柑甘く煮る夜なり  
 1 2 2 3 富士裾野すすきが原の夜明かな  
 1 2 2 4 機窓より雲の夜明や巴里祭  
 1 2 2 5 こきこきと背骨のきしむ不死男の忌  
 1 2 2 6 名月や盆地大きな光壺  
 1 2 2 7 百歳に今しばらくの春炬燵  
 1 2 2 8 銀漢のしたたるところ仙人草  
 1 2 2 9 病廊に医師と連弾聖樹の灯  
 1 2 3 0 秋淋しダリの時計にある砂漠

1 2 6 0	1 2 5 9	1 2 5 8	1 2 5 7	1 2 5 6	1 2 5 5	1 2 5 4	1 2 5 3	1 2 5 2	1 2 5 1	1 2 5 0	1 2 4 9	1 2 4 8	1 2 4 7	1 2 4 6	1 2 4 5	1 2 4 4	1 2 4 3	1 2 4 2	1 2 4 1	1 2 4 0	1 2 3 9	1 2 3 8	1 2 3 7	1 2 3 6	1 2 3 5	1 2 3 4	1 2 3 3	1 2 3 2	1 2 3 1
家訓なり「どぶろくぐいと柄杓で飲め」	水鶏笛合点ゆくまでこもり居る	裸子に拳ほどなる反抗期	秋灯下思ひきりよく栞して	身に入むやさすりし母の足細し	生きるとは戦うことよ蟬しぐれ	風青し中干の田を鷺発てり	秋の暮沖に「おおい」と地元の子	この山は所有者不明雉子鳴けり	まづ耳がこちらを向いて子鹿かな	気紛れに覗く居酒屋ちちろ鳴く	トーストの程よき色や小鳥来る	爽やかや礼深々と去るナイン	新豆腐箸は細身の津軽塗	耕畝忌や栞がはりの古切符	朝焼の埠頭出でゆく郵便船	芋の葉の朝日ころがる雫かな	蠚蠓を土間まで連れてくる子かな	袖裏のくれなる見せて卒業す	父母の墓でハーモニカ吹く年の暮	大枯木奥にマンション現るる	熟柿剝く母さん此でいいですか	護摩行の僧衣をぬらす春の雪	阿弓流為の渴きいやして鰻酒	月見草ダム予定地の村に咲き	マンホール落花ちりばめ市章浮く	松明けて茶碗の白のみな違ふ	余生とは独り身の子に栗を剥き	晩年の父の八勺菊贈	八十八鍵鳴らす音域天の川

1 2 9 0	投票日泰山木の花の嵩
1 2 8 9	ぼとぼとと青柿の落ち無観客
1 2 8 8	野分吹く別れた後のことなどを
1 2 8 7	わしわしと塩むすび喰む夏の峰
1 2 8 6	枯れ色の料紙のまままで雛納め
1 2 8 5	みちのくの十年白き曼珠沙華
1 2 8 4	献体を志す人秋高し
1 2 8 3	玫瑰の実や表札の文字うすれ
1 2 8 2	鞍馬へと辿る山道夕かなかな
1 2 8 1	玉砕を辞書で引く子の終戦忌
1 2 8 0	遠き子の声聞き秋夜更けゆきぬ
1 2 7 9	コスモスの向こう古墳群の夜明け
1 2 7 8	溪谷の蛇行朝露遡る
1 2 7 7	枢窓開け月光のひとしづく
1 2 7 6	ソーラーパネル一斉傾斜雁渡
1 2 7 5	月光を撥ね返しをる氷湖かな
1 2 7 4	滝しぶき浴び妙齡の長き足
1 2 7 3	駆け寄りて新入園の子を抱く
1 2 7 2	上り鮎いくたび跳んでここに来し
1 2 7 1	一病を持ちて余生や吾亦紅
1 2 7 0	天平の薨てふてふ超えて消ゆ
1 2 6 9	蓑虫や平平凡凡あるがまま
1 2 6 8	鬼灯の赫ちろちろに片頭痛
1 2 6 7	秋蝶にまつはられ母懐しき
1 2 6 6	仰ぐとは胸ひらくこと雁渡し
1 2 6 5	ふれて来し木の香草の香秋深む
1 2 6 4	別姓を論じる漢豆の飯
1 2 6 3	穂芒の散る気さらさもなく揺れて
1 2 6 2	月今宵沖の漁船を影として
1 2 6 1	膺天の大字の昼寝吾が自粛

1 2 9 1 身ぬちにも満ちて来る海ばつたんこ  
 1 2 9 2 バベルの塔悠悠登る蟻の列  
 1 2 9 3 写経紙に飛天の透し涅槃西風  
 1 2 9 4 斑鳩の深き眠りに月渡る  
 1 2 9 5 曼珠沙華仙女の忘れ形見かな  
 1 2 9 6 忠敬の歩で参る旅始  
 1 2 9 7 初御空ひんがしに大富士の燦  
 1 2 9 8 水すめり円空仏の粗削り  
 1 2 9 9 浦風にさやぐ蘆の穂定家の忌  
 1 3 0 0 潮入りの池波尖る木槿かな  
 1 3 0 1 これ以上惚けてたまるか日記買ふ  
 1 3 0 2 人日のみがき込まれし人力車  
 1 3 0 3 ころあひを見てゆくことに天の川  
 1 3 0 4 けふの畑けふの日和の穴惑  
 1 3 0 5 ルピナスを閉山草と遣り人  
 1 3 0 6 こめかみに風をあかるさ氷水  
 1 3 0 7 海一枚青空一枚鉄鎖の影  
 1 3 0 8 ビルを出づ西日ヒ首のごとく吾に  
 1 3 0 9 隠密の菊人形は菊を着ず  
 1 3 1 0 花魁の菊人形の菊厚し  
 1 3 1 1 砂浴びてあびていよいよ羽拔鶏  
 1 3 1 2 一枚も羽根舞つてゐず鷹柱  
 1 3 1 3 楊梅の己の熟れに耐へ切れず  
 1 3 1 4 峰雲や壊れ易きは男なり  
 1 3 1 5 木洩日の涼し絵画に居るごとく  
 1 3 1 6 恐竜の飛び出す絵本原爆忌  
 1 3 1 7 八月や嗷嗷まはる風見鶏  
 1 3 1 8 夏季講座在家仏教講師たり  
 1 3 1 9 片陰に杖一本の生存権  
 1 3 2 0 赤富士のごとく耀ふかき氷

1 3 2 1 流水を浜に引き上げ十三夜  
 1 3 2 2 芋の露土の匂の風吹きぬ  
 1 3 2 3 よく動く卒寿の父の日焼かな  
 1 3 2 4 きふより小さき歩幅冬に入る  
 1 3 2 5 蝙蝠が先に来ていた木陰かな  
 1 3 2 6 初雪や急勾配の屋根に住み  
 1 3 2 7 茄子と鶏ほたはた煮たる余生かな  
 1 3 2 8 秋高し「考える人」立ち上がる  
 1 3 2 9 若き日の日記の誤字よ秋灯下  
 1 3 3 0 曼珠沙華の中に一村ありにけり  
 1 3 3 1 棲みしもの皆追ひたてて野火走る  
 1 3 3 2 啓蟄や着物の仕付け糸を抜く  
 1 3 3 3 仏門に捧げて涼し墨衣  
 1 3 3 4 縁側をテラスと云ふ子牽牛花  
 1 3 3 5 病む母に故郷の話柿の秋  
 1 3 3 6 岬へとバツクパツカー風光る  
 1 3 3 7 夜の鱗雲億万の鱗降る  
 1 3 3 8 喜寿のなほ真すぐ生きたし稲の花  
 1 3 3 9 やわらかき団扇でしのぐ法事かな  
 1 3 4 0 収穫の駄賃メロンを二つ三つ  
 1 3 4 1 天竜川の石黒々と猛暑なる  
 1 3 4 2 骨董の椅子の猫足日脚伸ぶ  
 1 3 4 3 「万病に効くよ」と母の玉子酒  
 1 3 4 4 コロナ禍の直行直帰通院の汗  
 1 3 4 5 座布団にのれば落語家蟻蛙  
 1 3 4 6 藪椿山の時間の中に落つ  
 1 3 4 7 一条の線路青葉に消えにけり  
 1 3 4 8 湖底にも湯の湧くところ春の雪  
 1 3 4 9 新暦旅の予定は色文字に  
 1 3 5 0 芯舐める癖の叔父逝く鳳仙花

1 3 5 1  
1 3 5 2  
1 3 5 3  
1 3 5 4  
1 3 5 5  
1 3 5 6  
1 3 5 7  
1 3 5 8  
1 3 5 9  
1 3 6 0  
1 3 6 1  
1 3 6 2  
1 3 6 3  
1 3 6 4  
1 3 6 5  
1 3 6 6  
1 3 6 7  
1 3 6 8  
1 3 6 9  
1 3 7 0  
1 3 7 1  
1 3 7 2  
1 3 7 3  
1 3 7 4  
1 3 7 5  
1 3 7 6  
1 3 7 7  
1 3 7 8  
1 3 7 9  
1 3 8 0

空押し上げて跳ね上げて曼珠沙華  
やはらかく児を解き放つ花野かな  
少年に風の匂ひや夏の雲  
新米を掬ふ手のひら陽の匂ひ  
大根引く湖は比叡を映しけり  
牡蠣フライ噛めば濃密ミルクじゅわつ  
舞茸摘む両手の平に包むやう  
ふらここや白馬岳へ突つ込む如  
旧姓のままのボトルや水中花  
湯豆腐や酔いはなりと昼の酒  
珈琲を豆から挽いてソロキャンプ  
白菜漬戸板に並べ売られをり  
時雨るるや機織の音高く低く  
マスクして出産臨む豊の秋  
パソコンに触れざるものに雪女郎  
夏怒濤弟は散骨否と云ふ  
夏シャツの胸に食ひ込むだつこ紐  
セーターを抜けて八十路の息を継ぐ  
夜寒には熾火となって友を待つ  
はうれんさうスーぷ弱虫でいいよ  
瓦屋に並ぶしやちほこ青嵐  
滑走路跡地の畑終戦日  
窓拭きのゴンドラの人秋の空  
秋口に鴉鳴き飛びゴツホ想う  
北欧の蠟燭灯す秋燕  
敬老日我が似顔絵にハートの目  
色鳥の風を呼ぶ樹となりにけり  
十六夜や昼屋の猫跳び出しぬ  
新涼や帽子を置けば草の音  
ねじ巻けば飛び立ちさうな兜虫

1 3 8 1  
1 3 8 2  
1 3 8 3  
1 3 8 4  
1 3 8 5  
1 3 8 6  
1 3 8 7  
1 3 8 8  
1 3 8 9  
1 3 9 0  
1 3 9 1  
1 3 9 2  
1 3 9 3  
1 3 9 4  
1 3 9 5  
1 3 9 6  
1 3 9 7  
1 3 9 8  
1 3 9 9  
1 4 0 0  
1 4 0 1  
1 4 0 2  
1 4 0 3  
1 4 0 4  
1 4 0 5  
1 4 0 6  
1 4 0 7  
1 4 0 8  
1 4 0 9  
1 4 1 0

大茅の輪もちて地球の籬とせん  
携帯の声折りたたむ夜寒かな  
焼きたてのバゲットを切る小鳥来る  
敬老の記念品とて今年米  
葦原を風ゆく音や遠筑波  
星月夜まだ知らぬこと数多なり  
電線の左右より葛の延びにけり  
宮相撲見せむと吾子を肩車  
星月夜窯の火力を聴きにけり  
二重跳び無心に見せる炎天下  
再会の空、風、樹々よ秋澄めり  
ななかまど君も私もよく生きて  
夜勤明け車窓からくる青嵐  
浄土とは斯くあるらむや花吹雪  
夕立の雨宿りがくれた時間  
寒椿そのままわたし落ちません  
空をみて山みて田みて秋深し  
水温み小流れの堰歌ひ出す  
鳴いて鳴いてまだ鳴き足らず不如帰  
原子炉の散らばる祖国春愁ひ  
ネオン街抜け高原の星月夜  
大海に向きて天人菊の黙  
マスクして争ふ星となりにけり  
子の米寿祝ふ蛙のめかり時  
氷菓一盞のあいたさよひと恋うる  
烈風に揚がる凧あり吾もまた  
梅ひらく信じきるてふ力もて  
白々と情事のあとの冷蔵庫  
つゆ草は一日の青天の青  
激戦の糸満の声蝉しぐる

1 4 1 1  
1 4 1 2  
1 4 1 3  
1 4 1 4  
1 4 1 5  
1 4 1 6  
1 4 1 7  
1 4 1 8  
1 4 1 9  
1 4 2 0  
1 4 2 1  
1 4 2 2  
1 4 2 3  
1 4 2 4  
1 4 2 5  
1 4 2 6  
1 4 2 7  
1 4 2 8  
1 4 2 9  
1 4 3 0  
1 4 3 1  
1 4 3 2  
1 4 3 3  
1 4 3 4  
1 4 3 5  
1 4 3 6  
1 4 3 7  
1 4 3 8  
1 4 3 9  
1 4 4 0

夜濯や勝ち進む子のユニフォーム  
ごぼう堀り老主サクツと尺の鍬  
疫病と溽暑の首都に聖火燃ゆ  
薔薇剪つて小さき風の通りけり  
脇道へ逸れて見上げる涼夜かな  
奥吉野天の川から蛍降る  
ネジ花の脇を園児が行列  
足ることを知りてやさしき団扇かな  
改札は素通りの駅草いきれ  
はやぶさのカプセルに焦げ花の冷  
弁当蓋の米粒はがし食うて春  
天ぷら屋の油談義や八重桜  
流星や地下にシヤンパン熟成中  
セミ脱皮我もマスクかなぐり捨てたい  
譲り受く手かんなの椅子夏館  
郵便の届かぬ午後や秋高し  
チェンバロの清き音色よかすみ草  
秋蝶の風に逆らふ岸边かな  
口つぐむ港の人や霹靂神  
寒風が正義漢面して通る  
老猫の寝息たしかむ冬ひなた  
渡り鳥越えゆく山の名も知らず  
梅雨の朝山鳩鳴きて翳り増し  
首に巻くタオルもうだる積乱雲  
リカ婆は逆手に煙管大文字  
避難所に仄かな灯り生御霊  
舞鶴や水兵服の父の夏  
勝者より敗者美し晩夏光  
秋霖や悼む言の葉持たざりき  
芝台の蝉むくろにも手をあわせ

1 4 4 1  
1 4 4 2  
1 4 4 3  
1 4 4 4  
1 4 4 5  
1 4 4 6  
1 4 4 7  
1 4 4 8  
1 4 4 9  
1 4 5 0  
1 4 5 1  
1 4 5 2  
1 4 5 3  
1 4 5 4  
1 4 5 5  
1 4 5 6  
1 4 5 7  
1 4 5 8  
1 4 5 9  
1 4 6 0  
1 4 6 1  
1 4 6 2  
1 4 6 3  
1 4 6 4  
1 4 6 5  
1 4 6 6  
1 4 6 7  
1 4 6 8  
1 4 6 9  
1 4 7 0

蝶二つ卍となって瓦礫越ゆ  
風無きに風鈴の鳴る空家かな  
山笑う廃舎の奥にけものみち  
きらきらと水面蹴立てて鴨交る  
八月の耳よミユートをオフにせよ  
八月のひかりをつかむ赤子の手  
八月の翳り蹴飛ばすややの足  
砂浜になほ余熱あり大夕焼  
ピアスめく銀の補聴器アマリリス  
そよそよと日向あらはれ藤の花  
輪の中のひとりを探すキャンプの火  
合奏の音のそろはぬ桜かな  
秋霖や医者に着てゐる作業服  
水面に水玉走る野分かな  
盆東風やまだ葉の付きし流木に  
ヒロシマの夾竹桃の紅の濃し  
ムーンリバー笙に奏づる観月会  
仕舞湯の手のひらに乗る木の葉髪  
笛で散り笛に集まる運動会  
やり過ごす蕎麦のうんちく涼新た  
八月の可憐に強き草花よ  
人影を消してカンナの燃え残る  
手話の子の跳ねて指差す二重虹  
猫の子の喪服の膝へのぼりくる  
その白を羽毛とみれば蝶の立つ  
伏すよりは仰向け多し落椿  
オーデコロンつけて面接官になり  
潦ありし処に霜柱  
どの子にも戻る木霊や朝涼し  
柗挿す母拭き上げし台所

1 4 7 1  
1 4 7 2  
1 4 7 3  
1 4 7 4  
1 4 7 5  
1 4 7 6  
1 4 7 7  
1 4 7 8  
1 4 7 9  
1 4 8 0  
1 4 8 1  
1 4 8 2  
1 4 8 3  
1 4 8 4  
1 4 8 5  
1 4 8 6  
1 4 8 7  
1 4 8 8  
1 4 8 8  
1 4 8 9  
1 4 9 0  
1 4 9 1  
1 4 9 2  
1 4 9 3  
1 4 9 4  
1 4 9 5  
1 4 9 6  
1 4 9 7  
1 4 9 8  
1 4 9 9  
1 5 0 0

夕照の機体は点に秋の湖  
勾玉の容かたちに祈る終戦忌  
教室は素描の時間ラフランス  
かなかなのかなかなかなとかなしけれ  
秋高し水平線をなぞる船  
風花やドラマのなかに居るやうな  
縁側に残りし西瓜の種ひとつ  
塩田や海より迫る秋日影  
掠めゆく墓碑銘は「空くう」秋茜  
盆狂言古民家座敷開け放つ  
笑ふだけ笑ひ合ひたり茸飯  
指先に心臓のある野分前  
溪谷の日照雨の濡らす山法師  
夏暁や海岸前の釣具店  
海霧纏う船のみよしに立つ漁師  
帰省子に孔雀は羽を揚げけり  
尻取りのゴメンで終わる夏休み  
手のひらに夕焼け乗せてまた明日  
天瓜粉の香る少女のお下げ髪  
蜉蝣や尾は魚に頭は鳥に分く  
参道に暗きを残す夜店の灯  
かいつぶりぬるりと水の深みかな  
露草の路地を電気屋水道屋  
晩節や夜を分け合う黒葡萄  
手袋に生身の我を少し消す  
湯豆腐や妻に従ひ五十年  
天高し地球貫くニュートリノ  
落椿残る椿を照らしけり  
背筋はをとこの晴れ着夏祭  
贖罪のごとくゆきたり炎天下

1530	車椅子降りて竜舌蘭の空
1529	風船や手の温もりが飛んでいる
1528	高僧のやうに白鳥近づき来
1527	立春や本棚の本立て直し
1526	塗り直す蔵の白壁梅日和
1525	冬日へと向き揃へたる山家かな
1524	顔のなき土偶の乳房露けしや
1523	唐松の林を抜けて吹雪をり
1522	氷面鏡小石すべつてどこまでも
1521	己が影地に凝りて広島忌
1520	青芒活けて一日の定まりぬ
1519	火が風になるのが見ゆる大文字
1518	金箔に吸ひ込まれゆく虫の声
1517	風鈴や昼餉の匂ふ電器店
1516	橋懸かりに寄りて春鹿松を食む
1515	玉虫の片羽拾ふさびしさよ
1514	予後の身にずしりと重き今年米
1513	パラ五輪まはれ真夏の風見鶏
1512	薫風や廊下を磨く糠袋
1511	長き夜をともして水素ステーション
1510	懸大根仮設住宅静かなり
1509	水澄むや墨の重さで墨を磨る
1508	新そばの蕎麦湯自慢に出されけり
1507	明けぬ夜なし松島に春の風
1506	春の野の光になれと子を放つ
1505	ワクチンの医院出づれば虹二重
1504	雁渡し弔ふごとく枝拾ふ
1503	霜晴や小枝吞込む塵芥車
1502	振舞ひのどんぶり酒や斑雪山
1501	忘れ霜をんなの熱き土踏まず

1 5 3 1  
1 5 3 2  
1 5 3 3  
1 5 3 4  
1 5 3 5  
1 5 3 6  
1 5 3 7  
1 5 3 8  
1 5 3 9  
1 5 4 0  
1 5 4 1  
1 5 4 2  
1 5 4 3  
1 5 4 4  
1 5 4 4  
1 5 4 5  
1 5 4 6  
1 5 4 7  
1 5 4 8  
1 5 4 8  
1 5 4 9  
1 5 5 0  
1 5 5 1  
1 5 5 2  
1 5 5 3  
1 5 5 4  
1 5 5 5  
1 5 5 6  
1 5 5 7  
1 5 5 8  
1 5 5 9  
1 5 6 0

遺されて事の多さよ新盆会  
夕立後の馬の尾さばき岬山  
水草に息をひそめるメダカの仔  
いささかの裏切りのまま踊りけり  
干されたるビニルプールの静かなる  
放鳩の大きな渦や広島忌  
流水をくべて膨らむ焚火かな  
目でつなぐ大三角や虫の声  
亀鳴けり中村医師の井戸深く  
爺が婆押すぶらんこや鬼笑ふ  
交尾みつつ邑一杯に赤とんぼ  
待宵や夜風に雨の香りして  
ダムに沈む村の保育所木の实降る  
歓びのかたちひらくダリアかな  
凧強し十指に空の深さあり  
絶壁を修験者覗く素足して  
桐の花寧日遠くありにけり  
始発待つひとりひとりのさくら花  
電脳の世界の夜半のほととぎす  
行間を詰める再校文化の日  
桐の花断酒のころおのづから  
涼風といふ機知にさへ似たるもの  
約束も嘘もささやかさくらんぼ  
船笛にひらく夕顔かと思ふ  
風花す贖罪を終へたるやうに  
秋簾芸妓のぞかす昼の顔  
空は色雲は形に秋うらら  
新しき口紅の角春立ちぬ  
若葉風白衣の糊の固きこと  
兄妹丈を比べて星迎

1561 さまざまな塩取り寄せて衣被  
 1562 針千本飲まされさうな目借時  
 1563 天の川対角線にゐるふたり  
 1564 羽虫らの墓標や土手の彼岸花  
 1565 ものの芽やあの星までは二千年  
 1566 忘るまじこの虹母が忘れても  
 1567 飼猫の軽くなりたる夜涼かな  
 1568 小春日や遺品の時計遅れ初む  
 1569 辻立ちの僧のまとひし寒さかな  
 1570 茹で上げの枝豆扇ぐ社内報  
 1571 鵲日和多肉植物専門店  
 1572 大鍋に五徳のへこみ盆用意  
 1573 捨畑を幾多呑み込み真葛原  
 1574 蟬時雨一度も止まず無言館  
 1575 プランターに水多くせむ広島忌  
 1576 滝行者己の声を楯として  
 1577 牧童のバンド練習雲の峰  
 1578 口遊む古き讚美歌木の実降る  
 1579 夏牡蠣や啜れば海のほとばしる  
 1580 手花火に起承転結咲き尽くす  
 1581 螢烏賊星の明りと映りけり  
 1582 剣ヶ峰薄明永く星涼し  
 1583 此の浦の流燈ひとつ沖へ押す  
 1584 病む指の葡萄つまみて生つなぐ  
 1585 小さな手握りしめたる栗ひとつ  
 1586 徘徊の父の足早曼珠沙華  
 1587 朝顔や真ん中の子が水をやる  
 1588 滴りを聞く心音をきくやうに  
 1589 蹠のさぐりあてたる胡桃かな  
 1590 春愁や待合室の低きジャズ

1 5 9 1 春雷の無声映画の刃かな  
 1 5 9 2 水引の飾り結びや桃の花  
 1 5 9 3 鉦叩き買足しせねば急がねば  
 1 5 9 4 蟹渡る仏足石の小宇宙  
 1 5 9 5 心音の一滴を聴く苔清水  
 1 5 9 6 どこまでも裾野広ぐる秋の富士  
 1 5 9 7 浦々の光やさしき小春かな  
 1 5 9 8 塵一つなき禅室に咳一つ  
 1 5 9 9 青田なか直線裁ちに久留里線  
 1 6 0 0 その疾き影や正しく初燕  
 1 6 0 1 晴天に松高くして稲穂波  
 1 6 0 2 胸押せば話す人形秋思かな  
 1 6 0 3 別の世を生きる老女や穴惑ひ  
 1 6 0 4 笹鳴や母のボタンを留めやれば  
 1 6 0 5 暁の五階に蟬の生まれゆく  
 1 6 0 6 つと滑る脚しなやかに雨の鹿  
 1 6 0 7 解体やずくずく縮む温き鹿  
 1 6 0 8 寒暁や乳搾る手へ乳の湯気  
 1 6 0 9 何もかも捨てれば身軽赤とんぼ  
 1 6 1 0 先頭はピッコロの少女秋日和  
 1 6 1 1 白南風や南沙織を口遊ぶ  
 1 6 1 2 箱根路は晴れか曇りか走り蕎麦  
 1 6 1 3 潮の香の土の香となる運動会  
 1 6 1 4 ゆくあきよよみそめのうたのせてゆけ  
 1 6 1 5 プレゼンを小声で復習う秋の空  
 1 6 1 6 蝗飛ぶ右へ倣えはもうやめる  
 1 6 1 7 洎夫藍や枕をもらふ誕生日  
 1 6 1 8 草の花「あなたらしく」と言われても  
 1 6 1 9 ひと風呂を浴びて一人よ月見豆  
 1 6 2 0 白萩や湧き水維持の募金箱

1 6 2 1  
1 6 2 2  
1 6 2 3  
1 6 2 4  
1 6 2 5  
1 6 2 6  
1 6 2 7  
1 6 2 8  
1 6 2 9  
1 6 3 0  
1 6 3 1  
1 6 3 2  
1 6 3 3  
1 6 3 4  
1 6 3 5  
1 6 3 6  
1 6 3 7  
1 6 3 8  
1 6 3 9  
1 6 4 0  
1 6 4 1  
1 6 4 2  
1 6 4 3  
1 6 4 4  
1 6 4 5  
1 6 4 6  
1 6 4 7  
1 6 4 8  
1 6 4 9  
1 6 5 0

山装ふ只中たまごかけごはん  
フロントへシェフの花咲く夜食かな  
座るべき石の一つへ白椿  
町老いて梅雨に浮き出る屋根の錆  
手の甲にメモ書くナース夜業果つ  
秋の暮影をたたんで人去りぬ  
やはき手とごつき手を経て新茶かな  
サイパンの海あをあと十二月  
碧空や鷹の真白斑降りきたる  
雪を搔く隣家境界越えて搔く  
猿回し一座の子猿おむつして  
草の実を取りやる魔女のマントより  
鎖引く水洗トイレ敗戦忌  
名月や幾千万の宇宙ごみ  
玉葱の淋しき夜を微塵にす  
人波のよぢれて夕立走る街  
ジューサーの中の混沌駅の春  
反射炉の白き煉瓦や鳥渡る  
侏儒ならば蓮の花芯に目覚めたし  
漢音で読む唐詩選夜半の秋  
ペットボトルをばきばきと日永かな  
春雨や蕎麦屋に呑みて玉子焼き  
子を抱いて風の涼しき庭の椅子  
選挙ポスター芒に顎をくすぐられ  
だるまさんがころんだ白き壁に蜘蛛  
木犀や教室に鳴るチョーク音  
アラビアンナイトより夏溢れをり  
秋出水引きて遣りし豚二頭  
月山筍藪に探りぬ眼鏡付け  
原爆忌笹縁の赤の沈黙

1 6 5 1  
1 6 5 2  
1 6 5 3  
1 6 5 4  
1 6 5 5  
1 6 5 6  
1 6 5 7  
1 6 5 8  
1 6 5 9  
1 6 6 0  
1 6 6 1  
1 6 6 2  
1 6 6 3  
1 6 6 4  
1 6 6 5  
1 6 6 6  
1 6 6 7  
1 6 6 8  
1 6 6 9  
1 6 7 0  
1 6 7 1  
1 6 7 2  
1 6 7 3  
1 6 7 4  
1 6 7 5  
1 6 7 6  
1 6 7 7  
1 6 7 8  
1 6 7 9  
1 6 8 0

名月や工事現場で腕回す  
十月のマリンブルーの絵付皿  
秋日影刷毛目ざらりと素焼き壺  
野の芝の枯れて曼荼羅模様かな  
引鳥の十字架なして小さくなる  
手のひらに寿司屋の湯呑み寒土用  
秋蝶やインフィニティを描き飛ぶ  
コロナ禍の灯りなき街月天心  
いくたびも病みし地球や雁渡る  
終電の蟻に顎あり囓まれけり  
簾してマニユキアの爪かはきゆく  
海苔炙る鳴くものの無き里の夜  
君逝くや秋空の底抜けしごと  
月涼し文字消えかかる感熱紙  
猫じやらし踏切小さき世田谷線  
野馬追のドローン前後左右上下  
家出する次男金魚に餌やつて  
ペチュニアとパフェ収まらぬけど撮りぬ  
露草やシナモンティーの濃くなりぬ  
霜の夜や死して伸びたる父の髭  
色変へぬ松や干されし柔道着  
湯の口に湯の花厚し血止草  
夜長し下宿の壁の薄さかな  
木犀の香やアイロンのよく滑る  
継ぎ当てのジーンズ堅し草紅葉  
若返りの広告虚し秋の風  
埋火や母を求めし媪抱く  
他人ならおもしろい子と鳥渡る  
国境の戦なき空鳥渡る  
ひび割れた墨は桐箱はたた神

1 6 8 1 雪に醒め子を奪はれし如くなり  
 1 6 8 2 捕虫網かぶりて虫の気持の子  
 1 6 8 3 シリウスを右に保ちて舟を漕ぐ  
 1 6 8 4 鶏に寝返りうつや窓の月  
 1 6 8 5 折鶴の羽広がつて春隣  
 1 6 8 6 柿もぐやもう空つぽの祖母の家  
 1 6 8 7 セーターのひと目引っ張る茨線  
 1 6 8 8 境内に献血テント木の実落つ  
 1 6 8 9 万物の根源は火や朗人の忌  
 1 6 9 0 初鶏の声の浄める古都の路地  
 1 6 9 1 西日差すコンテナ運ぶトラックに  
 1 6 9 2 冬日和ひとり利き手の棘を抜く  
 1 6 9 3 金木犀エプロンの紐ぴんと干す  
 1 6 9 4 银杏散る鶴折るような音たてて  
 1 6 9 5 仕事着もエプロンも白去年今年  
 1 6 9 6 一日中鑿研ぐ修行菊日和  
 1 6 9 7 美濃紙に記す子の名や手毬花  
 1 6 9 8 渦潮や丁子乱れの日本刀  
 1 6 9 9 アトリエに大回転台秋日濃し  
 1 7 0 0 勾玉のごと猫眠る花圃の中  
 1 7 0 1 峯雲やぱぼと遺品の鳩時計  
 1 7 0 2 せり鍋や雪のにはひのする言葉  
 1 7 0 3 風荒く窓あおぐ夜の鍋料理 (点字)  
 1 7 0 4 大根が大いばりしておでん鍋 (点字)  
 1 7 0 5 さみだれや通学の路眼裏に (点字)  
 1 7 0 6 白無垢の娘に見とれ秋うらら (点字)  
 1 7 0 7 この夏のニュースの言葉「過去最多」 (点字)  
 1 7 0 8 一雨に青田は色の濃くなりぬ (点字)  
 1 7 0 9 朽ち果てし草屋根の上の水仙花 (点字)  
 1 7 1 0 五月雨や受けし唐傘音楽し (点字)

1711	さくら餅色も香りも美味かな <small>うまみ</small> （点字）
1712	初御空盲導犬と第一歩（点字）
1713	袋掛け三間梯ささえけり（点字）
1714	栗林足の先にていがを割る（点字）
1715	池の面眺むタヌキも月の友（点字）
1716	菊花展移り香もろたり盲 <small>めし</small> の手（点字）
1717	瓢箪のかけゆれているごごさんじ（点字）
1718	滑走路海へとのびて陽炎へる（点字）
1719	耳の穴指をあたたため読む点字（点字）
1720	街角の喧嘩神輿を杖も見た（点字）
1721	雨の日も楽し梅の実どっさりと（点字）
1722	心身の離ればなれとなり昼寝（点字）
1723	噛みしめるごとく石段下り秋（点字）
1724	満月や両手に光掬いたし（点字）